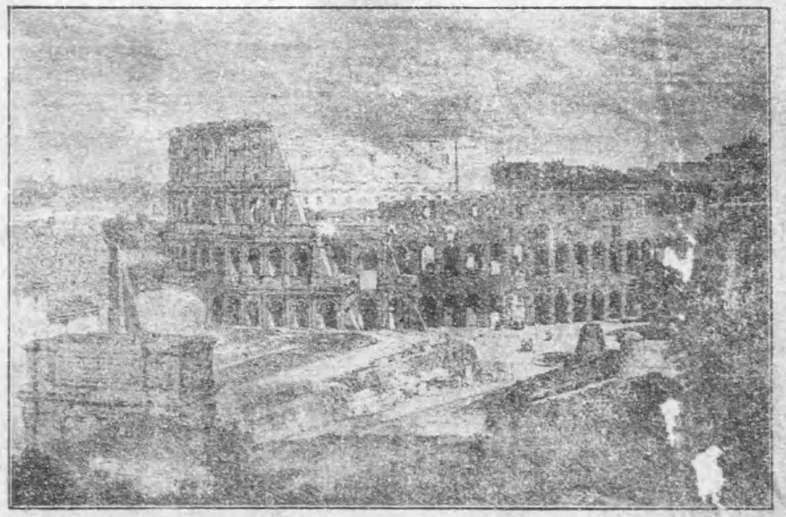
372-553
1200501449167
372
553

海外視察錄第十三卷

中目覺著

イタリア日記

大阪外國語學校



オゼリコ

始

慶長八年

九月晦日

伊達陸奥守

秋葉家貴御親方代用之
りうそうけうこう為
進之

於世界広大成貴御親の[illegible]御足
を吸奉り奥州之屋形伊達政宗謹而申上候
我国へさんふらんしすこの御もんはの内[illegible]
てうすの御法をひろめ[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
恐惶謹言

慶長八年

九月四日

伊達陸奥守

政宗

於世界貴御親大(?)御(?)へ
進上

はしがき

筐底から稍や古色を帶びた日記を探し得た。その中イタリア日記のところ〴〵を一册にまとめた。明治三十八年の一月初めに維也納を旅立ち、東アルプスに屬するカラワンケン山の南麓、今はユウゴスラビアに編入されて居るノエマルクトルに、四月の初めまで滯在し、其處からイタリアに入り、ベネチアを經て羅馬に着き、七月の八日、其處を去つてアンコナの港を船出して、イタリア國と分れた。尙ほイタリアを去つてから、其年の秋頃、ベルギイ國のブリツセルで書いたものも加へて置く。イタリアは美術と文藝の國であるが、私は此方面の事は能くわからない。それで所々文藝家の言を參照のため挿さむことゝした。重に太齋施門の伊太利紀行、ゲエテの伊太利紀行(高木敏雄譯)、アンデルセンの即興詩人(森鷗外譯)の諸書である。

昭和七年二月一日

大阪に於て

中目覺識

發行所寄贈本

872-553

目次

一月十二日　維也納を去る　一
三月　二日　亡き父の三回忌　二
四月　三日　イタリアに入る　六
同　四日　ベネチア　七
同　五日　羅馬に向ふ　一七
同　十八日　羅　馬　二六
支倉六右衛門
記念物　三七
同　廿二日　カタコンブ　四〇
羅馬に多いもの　五〇
同　廿六日　ゲエテ、タッソオ散策の地　五一
同　廿九日　墺伊兩外相の會見　五四
同　卅　日　萬國心理學會　五七
五月　二日　カイゼルの來遊　五八
同　六日　今の羅馬　五九
羅馬の客　六〇
同　八日　有栖川宮殿下　六三
同　十一日　改造中の羅馬　六八
海軍擴張案　六八
同　十五日　大　水　七二
同　廿七日　對馬海戰の報　七二
同　廿八日　農業調査局　七三
六月　一日　羅馬の氣候　七五
同　十日　羅馬人の避暑地　七六
同　廿四日　サン　ジオワンニの祭　七八
七月　一日　イタリアの暑さ　八五
同　八日　イタリアを去る　八八
以上　八九

イタリア日記

明治三十八年一月十二日

維也納を去る

中目覺草

維也納を立つたのは一月十二日の夜である。一寸イタリアの方へ行つて來ると在留邦人諸君に話すと、總見送り、但し公使館外の邦人は私共五人。

二等の一間に入ると、客は外に唯一人。井ラハの邊で夜が明けた。昨年夏見た時とは光景が一變して居る。此處で縣會議員らしい男が二人乘り込む。八時過ぎ、タルビスでライバハ行きの汽車に乘り換へ、東に向つてサワ谷を下る。十時過ぎボドナルトに着く。私が客にならうといふ家の主人具蘭君が出迎へに來てゐる。小さな停車場を出ると、二頭立ちの馬車が待つてゐる。

これを着たまへ寒いから、といふ外套は毛皮の厚い重いものである。それから谷を渡り林を通り抜け、山路にかゝつて馬車は走り行く。三里餘りも來ると、兩側は高い山、其間の谷川を

挾さんでゐる小さな町へ着いた。是が今私の居る處。カラワンケン山脈の中で、ライバハからクラアゲンフルトに通ずる國道に沿うた人口二千餘りのスロベエネ人の村である。

具蘭君は紡績工場の持主で、夫人との間に十歳ばかりの娘さんがあり、家庭教師に四十許りの英國婦人、外に料理人、女中二三人といふ家である。中々の田舎で誠に不便である。維也納の新聞が翌日漸く來る。露都の一月二十二日の事件も、セルギウス大公の暗殺も、滿洲軍左翼の激戰で日本軍が勝利を得たといふ事も、都の人よりは後れて知る譯である。唯トリエストのイル、ビツコロといふ新聞が其日の午後に來るから、之を讀む。

（ノエマルクトル、二月二十日稿）

三月二日

亡き父の三回忌

われこの村にきたりて、はじめのほどは、都とことなるしづけさに、心をさまたぐるものとてもなく、みどりなる山のえぞ松、さわやかなる風を友として、ひたすら文よむわざにふけりて、そゞろあるきもいつとはなくおこたりがちになりぬるほどに、しよう化やうやくおとろへ、やまとことばを聞くをりとてもなければ、心ぼそさいやまさるに、三月二日は亡き父の三回忌なることまで思ひいでられ、かなしともかなしかりき。よべ行李の中にふるさとよりたづさへきたれる紙とすみとを入れおきたるを思ひいで、紙はよきほどにきりて、すみもて亡き父の法名をかきて、ふしどに入りたるは十一時すぐるころにもやありけん。けふはあさ早くおきいで、身をきよめ、した着をきかえ、はかまにはあらでフロックコウトをとりいでてつけたり。室には机に白布かけたるあれば、ちりをはらひ、四かくなるかゞみのよきほどに立てるに、よべかきたる法名をはり、ろうそくを二つともし、おごそかにふしをがみぬ。七日があひだふりしきりたる雪も、きのふははれてほがらかなる日となりければ、春日もきにけりとよろこべるに、けさまど打ちあけて見るに、雪しめやかにふりぬ。さては天もわがかなしみをかなしむにやと思はれたり。心ばかりの弔ひもすみて、こし打ちかけたるに、父上のこの世におはせし時のこと、病おもきよしのでんぼうきたりて、いそぎ汽車にてかへるみちすがら、その年のけふは東京にて夜行にのりしこと、仙臺につきたるに、いでむかへたる弟の、なみだながらに父上ははやことをはりたまひぬと、告げたることなど思ふにつけ、なみだせきもあえず。みどりなるまなこの人々にこの情をわかつべくもあらじと思へば、わがかなしみを知る人とてはなく、たゞ一人なみだにくれたり。せめてはやまと文のかなしきものなどよみて、思ふがまゝなみだのあらんかぎりをながしてんと思へど、たびにいでたる身なれば、一まきだになし。臨終にもまくらべにはべらず、三回忌の今日まで西の國にさすらうとは、いかなるすくせにてやあ

りけんと、なみだの外にせんすべもなし。まして我れ父ののぞみにかなひたるほどの子ならんには、せめてものなぐさめともなるべけれど、亡き人はつねに學あさくかたくななる者よといましめたまひけるをや。父上のいまだこの世におはしゝ時ものがたりたまへるごとく、世のうつりゆくさまを見るにつけ、西の國にきたりて見もし聞きもしることの、おほくは亡き人のかんがへたまひしごとくなるを思ふにつけ、などて父上はかくもよくさとりたまひけんと思ふことおほかり。もとより父上はいとまだにあれば文よみたまはぬことゝてはなく、七十ぢのよはひをかさねたる後にても、わかきわれはかなふべくもあらざりけり。をりにふれて、心やりにとてものしたまふから歌をおきては、ひろく世の人にしめさんとてふでをとりたまふことはあらざりしも、おとづるゝ人あれば、かんがへたまひしことなどねもごろにかたりたまひけり。されど今こゝろにしるしをる人のありやなしやとはかなまる。西の國の人に類をもとめば、その行ひはトルストイの如く、その考はアナトウル、フランスなどにも似たまひけり、戊辰の事おこりけるとき、勤王をときたまひたるも、もちゐられざりきといふ。こは二十とせあまりのあひだ、たゞ一たびわれにものがたりたまへるのみなれば、おとづれし人々などに話したまへりとは思ひもよらず。ものゝふの一たびやぶれては、又いくさのことを言はぬたぐひにやあらん。忠と孝とをもとゐとしたまひしかば、われ主上に物たまはりてかへりける時などは、はかまを着けまちたまひけり。かくもすぐれたまひし亡き人の三回忌は、ふたゝびきたるべくもあらねば、およばんかぎりおごそかに今日の日をおくらんとて、けふは精進せんと思ひたちぬ。されば鳥けだものゝ肉などいでたらんには、パンと水とのみにてことたらんと思ひしに、ひるは米の飯にやきたるたまごのいでしかば、飯のみたうべたり。ゆふげはいかならんと思はるれど、パンと水とのみの覺悟だにあらば、なにくるしかるべきと思ひぬ。亡き人をおもふにつけても、老いたる母のこと、あらき風としこばらの矢玉とに身をさらす弟のこと、妻のこと、亡き人のこよなうめでたまひしわが子のこと、たびたちたるのちに生れたる女の子のことなどしのばれていと悲し。

（ノエマルクトル、三月二日稿）

【參照】

中目峡陽　　明治十二年

南山行

嘆息復嘆息。涕淚似流泉。豈爲微軀故。實感陵谷遷。櫻岡回首望。
腸斷夕陽邊。高城無古木。危壁聳秋天。胡角臺中響。軍旗營外翩。
莽々荒甲第。皚々餘廣川。俯思皷腹久。處變謬當年。雖由斥正議。
要之數或然。去向南山步。高墳山上連。愕然徹舊搆。墻屋皆既捐。

露碑暴風雨。文字漸崩騫。累代積勳跡。一朝恐失傳。世運有隆替。
輔導法前賢。丘木固戒斬。先塚焉不虔。既往且已矣。來者冀補全。
縱犯出位責。舒衷曾有緣。吁嗟奈汗俗。見利偏是牽。後來人若問。
諸君陳此篇。

送三男孚入軍團　　明治三十年十二月

吾家從古篤修文。未有先人策武勳。汝入兵團勤國事。須要忠勇
冠三軍。

四月三日

イタリヤに入る

ボンテッバから先きはイタリア領である。是迄とは餘程趣きが違ふ。獨墺や瑞西などでは、二等客は中々行儀が良く、氣持ちがよいが、イタリアへ來るとたまらない。二等客は餘程不作法である。だから案内記などにも、イタリアは一等の方がよいと國の相場をつけて置かれる。又他の國では、二等客は能く新聞を澤山買ひこんで讀んでゐるが、此現象がイタリアへ來ると餘程減じて來る。教育が低い證據の樣に見える。又獨墺などでは、二等客の多くは外國語を知つてゐるが、イタリアでは中々そうは行かんから、止むを得ずイタリア語で話しをしなければ

ならん。又乘客に對する食事の設備が不充分の樣である。時によると食物携帶の必要がある。それから、私がベネチアに向つた日などは汽車が四十分ばかりおくれ、ウデネの停車場で下りて夕飯を食べたが、大急ぎで乘り込んだ。又客が新聞などを讀まんから。ランプが誠に暗い。

（羅馬、四月十七日稿）

四月四日

ベネチア

アッチラの事は前に話したと思ふが、この亞細亞の大將に荒されて、アドリア灣頭の住民が難を避けたのが此ベネチアである。大きな灣の中に平らな砂の島が二つ三つあつたのであらう。四方は海で圍まれて居るから、陸軍だけのアッチラ軍に對しては至極安全であつたのである。遂に之れが基となつて、段々石を運んで來ては家を建て、町を作り、遂に立派な港となつた。十字軍の起つた頃から後は、益々盛大になり、東洋貿易の中心となり、或時には貴族政治をしたり、或る時は共和政治をしたりして、永く獨立をして居つた。然るに其の變遷と共に段々に衰え、且東洋貿易の勢力も墜ち、最近に至つては船が大きくなり、商業上の勢力をオオストリアのトリエストに奪はれ、海軍の鎮守府が置かれてあるけれども、今日では餘り必要のない港となつた。夫れにも係はらず、人々がベネチア見物に行くのは、一つは世界で有數の美術品の

所在地であるのと、モ一つは町の具合が誠に面白く、他に類がないからである。此町だけは二十世紀の文明世界に於て、今に馬車もなく電車もないのである。運河が縱横に通じて道路の代用をなし、ゴンドラと稱へる兩端の尖つた小舟が馬車の代りであり、小蒸汽が電車の勤めをしてゐると見て良い。それで停車場を出て直ぐ小舟に乘れば、何處へでも行ける。絶えず太鼓なりの石橋の下を通る。道路もあるにはあるが、元來が島であつて、面積に限りがあり、地面が惜い。そこで道幅が狹い。兩手をひろげると、兩側に屆く所がいくらもある。先づ八九尺が廣い方、それ以上は數へる程、だから家の表玄關は多く運河に面してゐる。さて此道路を歩いて見ると、一丁か半丁位で橋があり、石段になつてゐる。そして不規則な迷路になつてゐる。そゞろにカイロのアラビア人町のことが想ひ出される。

市中で一番名高い場所はサン、マルコ寺の門前で、古い立派な建物が澤山あり、朝から晩まで見物人や參詣人がぞろ〳〵と歩いてゐる。海岸に近くよく畫にかいてある。停車場と此サンマルコの間にエスの字なりの大運河があり、幅が廣く小蒸汽が通つてゐる。此運河の中程にリアルトの橋といふ名高い石橋がある。サン、マルコとリアルトの間は夜非常に賑はふ。

イタリアは一般にそうであるが、寺だけは驚く程大きな立派な金のかゝつたものである。又名高い畫工の繪などが寺や博物館に澤山ある。圖書館にも珍らしい書物が澤山あるだらうと思

ふ。支倉關係の古文書なども此處には相當ある筈である。

ベネチアで私の見た所を順に述べると、初日の午前にはサン、マルコ寺に詣り、宮殿へ行く。之はバラッオ、ドガナアレと稱へ、昔し政府のあつた處、中々廣く色々珍らしいものがある。それから海岸通を歩いて見た。午後はサン、バオロ寺へ行くつもりで出ると迷路に入りゼズイチ寺の前に出た。地圖を見て漸くサン、ジオバンニ、バオロ寺にたどりついた。

翌日は午前小蒸汽でリアルト橋まで行き、サン、ロッコ美術館、サンタ、マリア、グロリオサ、チフラリ寺を見、再び小蒸汽の世話になりチビロ博物館を見、宿に歸つて晝飯。午後美術館見物間に合はず、サンタ、マリア、デ、サルウテ寺に詣つて歸る。

此間には珈琲店へも市内の食堂へも床屋へも行き、土地の新聞も讀み、土產物も買ひなどした、先づ充分とあきらめる。

（羅馬、四月十七日稿）

【參照】

ゲエテ

伊太利紀行　一七八六年九月二十九日ミカヱル祭日午後

ベネチアのことは既に多く物語られてもゐるし、また書物にも成つてゐるから、吾輩は

詳細の叙述を避けて、たゞ吾輩の眼に映じた有様を述べる。何よりも眼につくのは、此處でも矢張り人民である、一大群集の必然的不隨意的存在の人民である。

此一族が此諸島へ逃げて來たのは冗談事ではない。後から來て加はつた者も浮氣の沙汰ではない。必要が彼等をして此有利な位置に自己の安全を求めしめるに至つたので、此位置は後に彼等の利益となり、北方全土が尙暗愚の裡に囚へられてゐる頃に、彼等は既に聰明の域に達してゐた。彼等の增殖と彼等の殷富は必然の結果であつた。それから住居が段々と上へ上へと押迫つて、砂と泥が岩に代へられる、家屋は密集して立つ樹林のやうに空中を求めて、間口奥行の足らないところを高さで補つて行くやうに餘儀なくされる。尺寸の地を爭つて、最初から狹い面積の上に押合つてゐるので、街路の廣さも、家並と家並の間に無くてはならぬ拔路の幅だけに限られるやうに成つた。併しベネチア人に取つては、水面が街路や公園や散步場の代りになつた。彼等は一種の新しい人類と成るべく餘儀なくされたので、ベネチアの町も全く他に比べるものゝない町と成つてゐる。蛇のやうに蜿つた大堀は世界の何れの街道にも後れを取らぬ。マルコ公園の前の廣場には、恐らく肩を並べることの出來るものがあるまい。その廣場と云ふのは、此方面から半月形にベネチアの町で圍まれた大海面のことである。この水面の上には、左の方に方つて、サン、ジオルジ

オ、マツジオオレの島が見え、その少し右の方にジウデッカとその堀が見え、尙遙かの右には**ドガアネ**と大堀の入口が見える。その入口のあたりには、最う二三の巨大なる大理石の寺院が吾々を迎へて輝いてゐる。吾々がマルコ公園の二本の圓柱の間から頭を出す時分に、眼につく主立つた物を云つて見ると、ざつとこんなものだ。內外のすべての景色は幾度となく銅版に鑄られてゐるから、諸兄は其を見て如何にも容易に實景を想像することができる。

食後に吾輩は、差當り全市の印象を得て置きたいと思つて、急いで宿を飛出して、誰もつれずに、大體の方角だけを頭に入れて、町の迷宮に踏込んで見た。町は大小の堀で縱橫無盡に斷切られてゐるけれども、大橋小橋で再び連絡してゐる。通路の狹くて窮屈なことは見た者でなくては想像ができぬ。大低兩方の腕を伸ばせば、通路の幅一杯に成る。極狹いところでは、兩手を腰に突張つたばかりで最う肱が突當る。無論稍廣い通路もあり、此處彼處には廣場もあるが、大體から云へばすべて狹いと云つても間違はない。

大堀とリアルトの大橋は容易く知れた。此橋は唯一つの大理石の眼鏡で出來てゐる。橋から見下した光景は雄大である。堀に充滿ちてゐる船は各種の需要品を大陸から運んで來て、主に此處に着いて荷揚げをする。その間をゴンドラが縱橫に步く。特に今日はミカエ

ル祭の當日であるので、其賑かな光景は實に眼も鮮かで何とも譬へやうがなかつた。併しながら、此光景を幾分なりとも描出して見ようと思ふから、吾輩は玆に少しく立戻つて根本から書立てる。

大堀を中に挾んだベネチアの兩大區を結びつける橋はリアルトだけであるけれども、幾つかの渡し場には屋根のない小舟が往來してゐるから交通には事を缺かぬ。今日は盛裝して黑い面衣を着けた婦人が、人氣のある大天使の寺院に參詣をするとて、大勢一緒に渡しを渡つてゐたので、頗る目覺しかつた。吾輩は舟から上つて來る連中を精しく見てやらうと思つて、橋を去つて、或渡し場へ行つた。大勢の中には、頗る美しい顏や姿が見えた。

疲勞れてから狹い通路を出てゴンドラに乘つた。今度は反對に水の上から見物する積りで、大堀の北の半分を乘廻し、聖クララの島を回つてラグウネへ出て、それからジウデッカの堀へ乘込んで、到頭マルコ公園の近くまで來ると、ゴンドラに乘るベネチア人が誰も感ずるやうに、吾輩も忽ちアドリア海の支配者の一人となつた。吾輩は此時父のことを想出した。父の第一の得意はベネチアの話であつた。吾輩もまた矢張父のやうに成るかも知れない。今吾輩を取卷いてゐるすべての物は尊いものである、綜合した人力の尊敬すべき大作品である、光輝ある記念碑である。一人の君主の記念碑でなくて、一國民の記念碑である。よしまたそのラグウネが段々に埋まり、有毒の氣が泥沼の上を蔽ひ、ベネチアの商業が衰へ、その權力が滅びたとしても、此共和國の全歷史と實質とに對する觀察者の畏敬の情は、瞬時も減ずることはあるまいと思ふ。眼に見える存在をもつて凡てのものと等しく、此共和國もまた時の力には勝つことができぬ。

ダサイ

伊太利紀行　六七―六八頁

ベネチアは海を正面にもつた港である。大小何十本の運河に切られた數百の島が町であり、水路が往來になつてゐる。淺瀨にこの水路を掘りうがち、數個の地點に軍船を艤ひせしめたベネチア人の天才と勤勞とは、「伊太利紀行」の著者で、同時に一王國の宰相であつたかのゲエテをすら驚嘆せしめてゐる。車は市中に一臺も無い。今日汽車は背面から長い堤防の上を一文字に軋つて町の背後に停る。旅客はそこから宿引に案内せられてゴンドラに乘り、背を向けた町の全長を突つ切つて海に近い正面に出る。そして附近の旅館に投宿する。逆の順に町を見たのである。從つてこの第一印象は餘り愉快でない。嚴島神社を船で參拜し、大鳥居をくぐつて社の正面に船よせした昔の順序を今日正式に踏んだなら、

我々の宮島觀はなほ數倍その樂しみを增したことであつたらう。ベネチアの海に向つて裝はれた全都會を、裏からのみ眺めて突つ切ることは、この世界唯一の町にとつて第一の不得策である。これによつてどれ丈滯在客がその旅程を短縮して、忙はしくこの都を立ち去ることであらう。

同　三一一―三一二頁

戰爭後のベネチア。世界のどの町よりも障害を受けたのがこの「海の女王」である。一切の旅行客が出發し、住民の大部分もこれに伴うた。それ程町は戰線に近く建てられてゐる。飛行機の襲來。爆彈投下。一寺院はこれがために破壞せられた。見たものゝ外、何人も夜のベネチアがいかにありしかを想像する事は不可能である。ただ一つの燈も無い、ただの一つも。すべて墓の姿である。他の町では金をまうけた男、金を消費する男があつた。こゝにはただ一人の戰爭成金が無く、住民の悉くが同時に同樣に不幸を經驗した。

戰爭が終る。更に幸福がこの都を訪れぬ。生活の困難。千フランで出來たゴンドラ一艘が今は六千フランかゝつて十分には出來上らぬ。この櫂、六リラの價だつたのが今は百リラ。食料は目玉の飛び出る値段。そして質はずつと戰爭前より劣つてゐる。多少の財產をもつてゐる町の住民。彼等とて不幸は我々と同じである。租稅が收入の四分の三を喰ひつくす。彼等は修繕に金をかける餘裕が無い。家、田園、すべて打ちやりのまゝである。自分の住居だけは已むを得ず自分で室に石灰を塗る。政府は恰かもベネチアが存在せぬ如く無關心である。更にこの町を救はうとは考へぬ。

アンデルセン

即興詩人　水の都

我は身を彼水上の柩に托して、水の衢に入りぬ。樓屋軒をならべて石階の裾は直ちに水面に達し、復た犬ばしり程の土をだに著けず。家々の窖隙門は水に架して橋梁の如く、中庭は大なる井の如し。この中庭には舟に帆掛けて入るべけれど、舳艫を旋さんことは難かるべし。海水はその綠なる苔皮をして、高く石壁に攀ぢ登らしめ、巍々たる大理石の宮殿も、これが爲めに水中に沈まんと欲する狀をなし、人をして危殆の念を生ぜしむ。況や金薄半ば剝げたる大窓の劉らざる板もて、圍まれたるありて、大廈の一部まことに朽敗にな
ん〳〵としたるをや。既にして梵鐘は聲を斂めて、檝の水を擊つ音より外、何の響をも聞かずなりぬ。われは猶未だ人影を見ずして、只〻美しきベネチアの鵠の尸の如く波の上に

浮べるを見るのみ。

舟は轉じて他の水路に入りぬ。その幅頗る狹くして石橋あまたかゝれり。こゝには人あり、或は橋を渡りて家の間に隱れ、或は石壁の門を出入す。されど街と名づくべきものは、水路の外有ることなし。舟人の棹を留めたるとき、われは何處に往くべきぞと問ひぬ。舟人は家と家との間を通ずる、橋の側なる隘き巷を指ざし敎へつ。兩邊の家に住める人はおの〳〵六層樓上の窓を開いて、互に手を握ることを得べく、この日光を受けざる巷は、僅に三人の竝び行くことをゆるすなるべし。我舟は既に去りて、身邊また寂として人を見ず。

あはれべネチアとは是か、海の配偶と云ひ、世界第一の富强者と云ひしべネチアとは是か。われは名に聞えたるマルコの廣こうぢに入りぬ。こはべネチアの心胸と稱すべき處にして、國の性命は此に存ずといふなるに、その所謂繁華は羅馬のコルソオに孰與ぞ、又ナポリの市に孰與ぞ。石の迫持の下なる長き廊道には、書肆あり珠玉店あり繪畫鋪あれども足を其前に留むるもの多からず。唯ゾカフエエの前には、幾個の希臘人、土耳格人などの彩衣を纏ひて、口に長き烟管を啣み、默坐したるあるのみ。日はマルコ寺の屋根の鍍金せる尖と寺門の上なる大いなる銅馬とを照して、チユベルス、カンヂア、モレア等の舟の赤

橋の上なる徽章ある旗は垂れて動かず。數千の鴿は廣こうぢを飛びかひて、甃石の上に糞れり。

われは進みてボンテ、リアルトに到りて、いよ〳〵斯土の風俗を知りぬ。べネチアは大いなる悲哀の鄉なり、我主觀の好き對象なり。而して此鄉の水の上に泛べること、古のノアの舟と同じ。われは小き舟を下りて、この大いなる舟に上りしなり。

日の夕となりて、模糊として力なき月光の全都を被ひ、隨處に際立ちたる陰翳を生せしとき、われはいよ〳〵べネチアの眞味を領略することを得たり。死せる都府の陰森の氣は、光明に宜しからずして幽暗に宜しければなり。われは客亭の窓を開いて立ち、黑き小舟の矢を射る如く黑き波を截り去るを望み、前の舟人の歌ひし戀の歌を憶ひ起せり。われは此時アヌンチアタを恨みき。

四月五日

羅馬に向ふ

夜ホテルを出て小舟で停車場へ向つた。例の太皷橋の下を幾度となく潛り、電燈やガス燈に照された運河の水に浪立てゝ、舟子の掛聲勇ましく漕いで行く。夜十時四十分の汽車に乘る。

夜の中にパドアやボロニアなどを通り、アペニン山を横切り、朝フイレンツエに着く。ポオの平野もアペニンの山も見ることが出來ない。フイレンツエの邊になると、山が高からず、人家が稠密といふことが汽車の窓から能く判る。樹木は少い方だが、耕作は能く行き届いて、日本の近畿から中國邊を旅行する樣な氣がする。特に久し振りで珍らしく思うたのは、桑畠の間に處々桃の花が今を盛りと咲いて居り、菜の花がさき、暖かい風がそよ吹いて居ることであつた。

アルプスの蔭の方の國々獨墺などを想像すると、霧が深く日の光も薄い樣に感せられる。丁度日本で敦賀からトンネルを拔けて江州に入ると、山一つ彼方は日光も薄い樣に感せられるのと同じであらう。

【參照】

ダサイ

伊太利紀行　一一六 — 一一七頁

塔の都である。幾十本といふ塔が町にそびえてゐる。「月を追うて動く」とダンテが歌うた斜塔が二本相列んでその中に立つてゐる。またボロニアは主な往來が柱、アルカアド（アアチ形の軒屋根）で歩道と車道とを分つてゐる。無數の凝つた住宅建築がその間に散在する。長い歴史の曲折を思はせる鐵格子が入り口にはまつてゐる。寺院、城門、どれ一つ見のがせない。殊に寺院内の墓碑や禮拜堂に町の誇りである傑作が列んでゐる。

有名な大學——世界最古の——と繪畫館、後者はラファエロ初期の作セント、セシルを見るだけにでも杖を曳くことが望まれる。こゝでアカデミクな畫風を宣傳したカラッチ一族の繪は無數にある。ただうるさく附きまとふ番人の監視は實に不愉快である。サッサと旅宿に逃げ歸つて、明日の旅行の準備をする。次ぎはフイレンツエである。机上の旅行者にボロニアの印象は殆んど消え盡してゐる。モンテエニユ、ブロス、テエヌ、スタンダアルの記述もこの點で何の感激をも自分に與へない。この町のもつ不幸な弱みは餘りに近くフイレンツエを控へてゐることである。そして一日二ヶ月に足らぬ短期間に伊太利を歴遊する無しつけな旅客に見舞はれたことであつた。

同　一一九 — 一二〇頁

伊太利で一番藝術的な都、文學、藝術、科學の發源地として隨一に推される町がフイレンツエであることは誰も知つてゐる。こゝの住民の日々の配慮は、いかに文章を美しく書き得るかにかゝつてゐたと適當にある文學者が言つてゐる。町を訪れた一外國人は、町全

體が世界の知識に注意する興味の廣さと深さとで先づ舌を捲く。サンタ、クロッエの寺だけに收められてゐる遺骨を見ても、この町の生んだ天才の數多いのに人は驚かずにゐられない。入り口の右にミケランジエロの墓がある。少し奥にアルフイエリのカノワが刻んだ墓石が立つてゐる。ついでマキヤベリの墓があり、ミケランジエロの眞向ひにガリレオのそれが對してゐる。ダンテ、ペトラルカ、ボツカチオ、みなこの町か、でなければ近くの村邑に生れた伊太利人の誇りである。スタンダアルでなくとも、サンタ、クロッエの廣場でベンチに腰を下ろし、有名なフオスコロの詩を口ずさまぬものはあるまいと思はれる程である。

同　一二七 — 一二八頁

翌日、晴れた春日の中を、山莊の多い左岸の丘に昇つて半日逍遙した時の感想を思ひおこす。幹の細い眞綠の木、碧瑠璃の空、清いアルノ、すがすがしい田野を背景にひろげられた都市の全形を包む感情は、徹頭徹尾なだらかな線と面との起伏になる繪模樣の美しさから成つてゐる。ゴチクの塔よりも、圓い穹窿がこの町の魂に相應する。鐘樓の高さも、その單調な全形と繪畫的な裝飾とで緩和されて、更にベネチアのそれのやうな豪宕、威壓の物々しさを示さない。力と意氣との表現はこの町で禁物である。なだらかさ、清純、優婉、それは都を取りまく丘と、流るゝ川と、滴る綠の青葉と、そして淺黃色の空とがこの町に課する趣味である。これに反抗せず、よし反抗するともそれは徒らな物笑ひとなつて終つたまでゞあらう。フイレンツエ人はこの趣味を自らのものとして、これを藝術によつて表現せんとした。大聖堂の前に相對してゐる洗禮堂の扉、ミケランジエロが「天國の門」と呼んだと傳へられるギベルチの扉は彫刻でなくて繪になつてゐる。繪に刻んだ事を賞嘆した批評家もあれば、青銅彫刻の本領を忘れたとして非難するフランス人のあることをも自分は知つてゐる。少くとも、この町の藝術家はすべてを繪模樣に化し了らうとする心に知らず識らず動かされたのではなからうか。一色の單調の中に寂莫と孤獨とを直感し、それを緣として直ちに己が心の中に神を見んとする修院が、こゝではサン、マルコのそれのやうに、鮮麗な壁畫によつて一々の小房までが美しく飾られてゐる。窓の小さい構造であるがために、廣い壁が繪に塗られるのはまだしも禮拜堂の柱まで一面不朽の作として後世に傳へられる名畫のカヌワスとなつてゐる。祭壇を取りまく三方の壁、蠟燭の焰で汚されようが、信徒の眼からは容易に認め難い距離に置かれようが、一切が繪でなければならずあらゆる平面は美麗な色彩で埋められねばならなかつた。これがこの町の生んだ多數の畫

家となり、ウフイツチ、ピツチ、二つの畫廊に主として收められた數千枚の畫面となつた。

ゲエテ

伊太利紀行　一七八六年十月十八日夜ボロニア

昨日午後吾輩は愈々この古い、尊敬すべき、學問で名高い町を脱出した。殆んどすべての街路に設けられてゐる圓天井の廊下の中を、日光と降雨から保護されて、右に往き、左に動き、立つては眺め、止つては買ひ、種々と取引をする民衆の群を脱出して、塔に登り、廣々と遮りのない空中の樂みを求めた。眺望は此上もない。北の方にはバヅアの山々が見える。それから瑞西の山、チロルの山、フリウリ、アルプスの連鎖、一口に云へば、北方の山系は全部見えるのであるが、其時は丁度霧に包まれてゐた。西の方の際限ない地平線上には唯モデナの塔だけが頭を出してゐる。東の方にも同じやうな平面が續いてゐるが、その果のアドリア海は日沒の時でなくては見えぬ。南の方に見えるアペニンの前丘陵が、頂上まで開墾され、植林され、寺院宮殿別莊を建てられてゐる有樣は、ナツエンツアの丘陵によく似てゐる。空は拭つたやうで一片の雲も無い。唯地平線上に一種の高層烟が見える。塔守の云ふところによると、今年で最う六年の間、この霧があの遠いところを立去らない。以前は望遠鏡でナツエンツアの山々から人家や寺院までがよく見えたのであるが、今は極々晴れた日にでも罕に見える位である。而も此霧が多く北の連山にかゝるので、吾々の大事な故郷は全く暗黑國のキムメアになつてしまふ。塔守の男はまた、このボロニア町の位置と空氣が健康に適してゐる證據には、町の家の屋根を見るとよくわかる、どの屋根も葺きたてのやうに見えて、濕氣や苔に犯された瓦は一つも無い、と吾輩に敎へてくれた。成程、どの屋根もすべて淸潔で美麗に見える。併しながら、瓦の質の良いのも幾分か其原因になつてゐるらしい。少くとも昔は此地方で上等な高價な瓦が燒かれたものだ。

同　一七八六年十月二十二日午後　ジレド

ジレドもまたアペニン山上の一小聚落である。吾輩は願望の地にむかひつゝ、此處に極めて幸福を感ずる。今日馬に騎つて伴侶になつた紳士と婦人は、例の妹をつれた英國人である。兩人の馬は立派だつたが、從者をつれてゐないところを見ると、紳士が馬丁の役目も家扶の役目も兼ねてゐると見える。兩人は到處に不平の種を發見する。聞いてゐると、アルヘンホルツの作を二三枚讀むやうな心持がする。

吾輩の眼に映じたアペニン山系は一片の珍世界である。ポオ河地域の大平面の盡るところに一山系が低地に聳え立ち、兩海洋の中間に南へ延びて大陸の終點になつてゐる。若し

この山系が餘り嶮峻でもなく、海面上に餘り高くも聳えなくて、其上にまた餘り複雜に入組んでもゐなかつたら、太古時代の海潮の干滿は更に深く、更に久しく勢力を及ぼして、更に廣大なる平原を構成し、其表面を洗ふことが出來て、此地方は他の陸地より少し高い位で、世界に比類ない良國土として最好の氣候の中に横たはつたに相違ない。ところが惜いことには、此山系は互に相接近した山背から奇妙に織成されて、時々眼の前を流れる溪河の進みゆく方向さへ看取するに困難である。谷々が今少し豐富で、平原が今少し平坦で洗はれゐたら、此地方はボヘミアに比べられるかも知れぬ。但し其山々だけは、樣々に一種異つた特色を帶びてゐる。併し此地方は山地ではあるが、多くは開墾されてゐるから、不毛な山岳地方だと想像してはならぬ。栗も此邊では隨分美しく出來る、小麥も見事で、苗畑も既に綺麗に靑くなつてゐる。路傍には葉の小さい常綠の槲樹が見え、寺院や禮拜堂の周圍にはすらりとした扁柏が植られてゐる。

昨晩は曇つてゐたが、今日は再び晴れた美しい天氣に成つた。

汽車はアルノ河に沿うて南に向つて走る。雪といふものは東方の高山に僅かに見えるだけで、岡の上には處々城跡などさびしく殘つてゐる。概して平凡な景色と言はねばならぬ。此單調を破るものがキウゼの湖水で、右側に暫くの間見えて居る。尙ほ進むと名にし負ふチベル河の上流に沿うて下る。然し景色は相變らず平凡で、處々羅馬時代か中世紀かの橋や道路の遺跡が見えるだけ。河端の柳は新綠うるはしく、二千餘年水の流れの絕えぬのを眺めて居ることであらうが、國は幾度か幾十度か變つて、昔の面影は殘つて居らない。

愈よ羅馬に近づくと、趣きが異る。大波を打つた樣な高低のある野は、見渡す限り綠の草が生えて、牛や羊が處々にさまよひ、牧童はのどかな春の日に破れ衣をさらして草の上にねて居る。是がカンパニア、ロマナで歌にも小說にも度々出る處である。

右手にサン、ピエトロ寺の屋根が見えて用意をすると、間もなく汽車は羅馬の都に入つた。ゲエテは羅馬の位置について斯んな事を言うて居る。

昔の事を考へなければ、今の事が判るものではない。そして此比較といふ事は時もかゝるし、心を落ちつけてかゝらねばならぬ。此の世界の首府の位置を見ると、其創立の時を想ひ起さゞるを得ない。我々の見る所では、此地は他國から入り込んで來て、能く統禦された大民族が、世界の中心としようとして甘く選んだ處とは決して思はれない。又勢のよい大名が其殖民地にする積りで、適當な場所として選んだ處とも思へない。之れに反して羊飼ひや愚民が先づ此處に村を作つたのである。澤邊の葦原の中に住んで居つた僅かの若

者共が、岡の上に世界支配者の宮殿の基礎を置いたのである。抑も羅馬の七つ山と言ふのは後方の土地に對して高い處ではない。チベル河とマルチウス河原と呼ばれる昔の河床に對して高いだけである。春になり散歩でも出來る樣になれば、羅馬の地勢を委しく說明することが出來るであらう。

その通りである。歐洲の町は家が高いから、始めて來ては、どちらが高いか低いか分らん。少し散歩をすると判る樣になる。羅馬では モンテ ピンチョ 并ラ ボルゲエセ ボルタビア、カピトロ、パラチノなどへ行つて見ると段々地勢が判つて來る。三日位はかゝる。地圖で見るのと實際の感じとは違ふから、初めの二三日はむやみと歩くに限る。

（羅馬、四月十七日稿）

四月十八日

羅馬

前にゲエテの言葉を引いたが、彼は其後に又、羅馬ほど位置の惡い都が、恐らく天下に無からうと言うて居る。是は一般の說らしい。淋しい町が偶然發達して、遂にはアジア、アフリカ、ヨオロッパの三大洲に跨る大帝國の首府となり、天下の榮華を極めたのである。所が今日昔の

羅馬大帝國の首府を見る積りで羅馬に來ると、大に落膽する。やはり三四十年前に出來た王國の首府として見る方がよからう。前にカンパニア、ロマナの光景を述べたので、大體想像がつくと思ふが、も少し地形を述べると、大波を打つた樣な野原の中を、北から南へチベル河が流れて居り、羅馬のある所で西の方へ弓形にふくれ、その東側は、昔し八幡河原（カンプス、マルチウス）と稱へた所で、平地がある。この僅かばかりの平地に向つて、七つ山と稱へるものが延びて來て居る。此山なるものは、ゲエテの言ふ通り、山ではないのである。丁度東京の本郷臺とか小石川臺とか上野などが、東の方に向つて出て居るのと同じ形で、奥の方が低くなつて居る譯ではない。高さも東京の上野位のものであらう。先づ南の方には、カピトロ山を中心として、パラチノ、アベンチノ、セリオと言ふ三つの岡が周圍にあり、此處が抑も羅馬發祥の地であり、全盛時代には大廈高樓棟を並べて居つた。それから東から北に向つて、前の八幡河原の東側にエスクイリノ、并ミナレ、クイレナレの三つの岡が續いて、一番北にピンチョ山といふのがある。但し之は七つ山の中に入らない。

偖て羅馬帝國の長夜の夢も、蠻人の侵入によつて破られて以來といふものは、亂世に亂世が續き、大廈高樓に住む人もなくなり、何時の間にか崩れてしまひ、中世時代には埃捨場になつたり、羊飼の休み場となつたりした。昔の名も忘れられ、カピトロなどはカプリノ山（羊山）

と稱へられ、昔の大廈高樓の跡は崩れた石や瓦で四十尺以上も埋もれてしまひ、又崩れないものも、何の爲めにこんな無用の長物が建つて居るか、わからぬから、此處から石を崩し取りては、北の方の平らな八幡河原へ新に小さな家だの寺だのを建てたものである。この四十尺も地の底に埋まつた昔の町は、百年程前から掘り出されて、今では色々のものが現はれて來、又修理などをして、保存の方法を計つて居る。是と同樣に、市外も荒れ果てゝ、人の居らぬ所は、雨の降る度に、高い方から土が流れ、低い所の建物や何かを埋めたのである。だから昔よりは今の羅馬が余程平らになつた譯である。

そして人口の最も減つた時は、二萬足らずの小さな町になつた。そこで昔の羅馬と今の羅馬とは、別物と見て善い程である。唯所々下の方が埋まつて、上の方だけが地上に現はれて居る昔の遺物があるだけで、新しい町はドシ〳〵北の方に出來て來て、今日では人口が五十萬に達した。其處で昔の羅馬の中心と今の羅馬の中心とは余程違うのである。

天主教の本山ワチカンは、市の西北に當り、チベル河の向側にある。此本山が羅馬にあつた御蔭で、今日まで續いて居るけれども、さもなくば、數百年の昔に、無人の地となり、コリゼオやパンテオンはふくろうやかうもりの巣となり、時折歴史家とか詩人とかゞ訪れ來るに止まつたかも知れぬ。

三大洲に跨る大帝國の後が、此有樣であるのを見ては、誰でも羅馬の盛衰といふことを考へぬ者がないであらう。それで世に羅馬盛衰記といふものが澤山あり、羅馬の事は一日で話しつくせない。

今のイタリアが、首府を此處へ定めたのは、決して場所が良いからではない。一には法王の勢力を弱める爲めと、一には歴史上不滅の地であるからである。さもなければ、ポオの平原を前に控え、後にアペニン山を負ふ、ボロニアの樣な處が、中歐諸國にも近く、却つて良かつた事であらうと思ふ。兎に角羅馬は昔から人爲の都で、今に至るまで人工で維持して居る。天然の見るべきものは地味の豐饒と云ふ位の處であらう。人の手で出來た物になると、建築繪畫彫刻等非常に多い。世界の見物人を引き寄せて、金の落る事は、瑞西の風景などの比べものではない。そこで今では市の東北の山の手などは、新式の大廈高樓が一雨毎に增え、多くは宿屋と下宿屋であるが、三月から五月にかけては、見物人が多いから空間もない樣に外國人が入りこんで居る。それで羅馬が古い都だから、さぞ靜かであらうと思ふと、大間違ひ、中々にぎやかでさわがしい。此も夏になると、氣候が惡いといふので、がら明きになると云ふ話である。

（羅馬、四月十八日稿）

【參照】

ダサイ

伊太利紀行　二一七―二一八頁

荒れ果てた羅馬郊外のカンパニア、それは正に聖書に說かれてゐるチイルやバビロヌの荒廢をこえて人の面をそむけしめる。數里にまたがつた廣い平野の上を、沈默と寂莫とのみが支配する。通行人の無い、冬の急流がたぎつたあと、乾かたまつてゐる燒け土の線が敷き固められた大道の如くこゝそこに隱見する。淋しくその上にアクデユク（導水橋）の殘骸が立ちならぶ。樹木は殆ど無い。至る所廢墟と墓である。死人の灰と帝國時代の遺物とから出來上つた死の平野である。豐かな收穫らしく見えるのは、枯れ草が堆く積み重なつて、かりに人の眼を欺く幻覺に外ならない。鳥も家畜も農夫も、すべて野の動きと呼ばれる何ものも無い。永遠の都羅馬はこの荒廢の中にひとり聳えてゐるが、もとより都でなく、死骸であり、亡靈の裝ひを他の都市の前に示しながら立ちすくむ。地上の世界から離れて、單獨に過去の禮拜を守る、信心深い道者の姿である。或ひは寂莫のうちに不幸を隱す、位をすべり落ちた女王の淋しさと尊嚴とを想はしめる。

ゲエテ

伊太利紀行　一七八六年十一月五日　羅馬

今日で七日になる。此町の大體の概念が段々と吾輩の頭の中に出來てくる。吾々は精出して彼方へ行き、此方へ歸りしてゐる。吾輩は舊羅馬と新羅馬の圖面を研究し、廢址を眺め、建築物を見物し、彼方の別莊、此方の別莊を訪ねてゐる。最大の壯觀へは漸次に手をつける積りである。吾輩は唯眼を開いて、眺めつゝ來往してゐる。要するに羅馬見物の準備は羅馬へ來てからでなくては出來ない。

併しながら吾々は白狀する。新羅馬から舊羅馬を掘出するは辛い悲しい仕事である。辛くとも止むを得ないので、無上の滿足を希望して、此仕事に從事するのである。過去の榮華と滅落の跡は共に吾輩の想像以上で、新羅馬の建築師は蠻族が殘したものを破壞してゐる。

羅馬は二千年或は二千年以上を經た存在である。歲月の變轉を經て幾度となく、而も根柢から變ぜられつゝも、尙昔のまゝの土地、昔のまゝの山、甚だしきは昔のまゝの圓柱と城壁を保存し、人民の間にも昔の性格の痕跡が今だに殘つてゐるのを見る時に於て、吾々は運命の大會議の席に參加するのである。而してまた、如何にして羅馬は羅馬に續きしや

新羅馬と舊羅馬の接續、新舊羅馬の種々の時代の連續如何を順を逐うて追想することは、觀察者に取りて最初から困難に成るのである。吾輩は唯はじめに半ば隱れたる諸點を發見せんと骨折つてゐる。この努力の後に於てはじめて、有難い準備事業は完全に利用され得るのである。第十五世紀以來今日に至るまで、優秀の藝術家と學者は此問題のために畢生の努力を惜まなかつたからである。

吾々が最高の事物に到達せんとして羅馬の町を急がしく往來するときに、この巨大なる怪物は極めて平靜に吾々の心に影響を與へる。他の町では、吾々は顯著なるものを探さなくてはならぬのであるが、羅馬では吾々は顯著なるもの、重大なるものに壓迫され、押しかぶせられる。すべての種類の風景は一歩毎に吾々の眼前に現出する。宮殿と廢址、庭園と荒地、遠望と狹隘、家屋、馬屋、凱旋門、それから圓柱、時としては、すべてのものが一枚の畫面に上されることができる位に近く集合してゐる。此處では千莖の鐵筆を以て記錄しても尙足らない、一本のペンで何ができるものではない。そして吾々は一日の觀賞嘆美の後に毎晩綿のやうに疲勞する。

同　一七八七年二月二日　羅馬

隱なき月の明りに羅馬を巡りあるく美しさは羅馬を見た者でなくては想像することができぬ。すべての個物は光と影の大塊に呑込まれて、眼に見えるものは最も大きい最も一般的の形象のみである。三日以來吾々は最も明るい最も見事な夜を十分に完全に樂んだ。特に美しい光景を呈するのはコリゼオである。夜は鎖されて、一人の隱者が其境內の小寺院の畔に住み、幾人かの乞食が毀れた窖の中に寢泊りをする。彼等は地面に焚火をしておく靜かな空氣に漂うて其烟が先づアレナに向ふと、廢址の下部が包まれて、上方の巨大な築壁が黑く聳立つ。吾々は柵の邊に立つて此幻影を眺めた。月は高く淸く懸つてゐた。次第に烟が壁の間の割目や隙間を潛つて動くと、月の光に照されて霧のやうに見える。其光景は實に何とも云へなかつた。百神殿もカピトロも、ピエトロ寺院も其他の大街道大公園も矢張月の光で眺める必要がある。巨大な而も人の手に成つた大塊の存する羅馬に於ては、日と月は人間精神と等しく、他の地に於てよりも全く異つた仕事をするのである。

アンデルセン

即興詩人　露宿、わかれ

月はカピトロ（羅馬七陵の一）の背後を照せり。セプチミウス　セエルス帝の凱旋門に

登る磴の上には、大外套被りて臥したる乞兒二三人あり。古の神殿のなごりなる高き石柱は、長き影を地上に印せり。われはこの夕まで、日暮れてこゝに來しことなかりき。鬼氣は少年の衣を襲へり。歩をうつす間、高草の底に横はりたる大理石の柱頭に躓きて倒れ、また起き上りて帝王堡の方を仰ぎ見つ。高き石がきは、纏はれたる蔦かづらのために、いよゝおそろし氣なり。青き空をかすめて、ところ〴〵に立てるは、眞黑におほいなるいとすぎの木なり。毀れたる柱、碎けたる石の間には、放飼の驢あり、牛ありて草を食みたり。

あはれ、こゝには猶我に迫り、我を窘めざる生物こそあれ。

月あきらかなれば、物として見えぬはなし。遠き方より人の來り近づくあり。若し我を索むるものならば奈何せん。われは巨巖の如くに我前に在るコリゼオに匿れたり。われは猶きのふ落したる如き重廊の上に立てり。こゝは暗くして且冷なり。われは二あし三あし進み入りぬ。されどこだまにひゞく足音おそろしければ、徐に歩を運びたり。先の方には焚火する人あり。三人の形明に見ゆ。寂しきカンパニアの野邊を夜更けては過ぎじとて、こゝに宿りし農夫にやあらん。さらずばこゝを戍る兵士にや。はた盜にや。さおもへば打物の石に觸るゝ音の聞ゆる如し。われは卸歩して、高き圓柱の上に、木梢と蔦蘿とのおほひをなしたるところに出でぬ。石がきの面をばあやしき影往來す。處々に抽け出でたる截石の將に墜んとして僅に懸りたるさま、唯〻蔓草にのみ支へられたるかと疑はる。

上の方なる中の廊を行く人あり。旅人の此古跡の月を見んとて來ぬるなるべし。その一群のうちには白き衣著たる婦人あり。案内者に續松とらせて行きつゝ、柱しげき間に、忽ち顯れ忽ち隱るゝ光景今も見ゆらん心地す。

暗碧なる夜は大地を襲ひ來たり。高低さま〴〵なる木は天鵝絨の如き色に見ゆ。一葉ごとに夜氣を吐けり。旅人のかへり行くあとを見送りて、ついまつの赤き光さへ見えずなりぬる時、あたりは関として物音絶えたり。この遺址のうちには、耶蘇教徒が立てたる木卓あまたあり。その一つの片かげに、柱頭ありて草に埋もれたれば、われはこれに腰掛けつ。石は氷の如く冷なるに、我頭の熱さは熱を病むが如くなりき。寐られぬまゝに思ひ出づるは、このコリゼオの昔語なり。猶太教奉ずる囚人が、羅馬の帝の嚴しき仰によりて、大石を引き上げさせられしこと、この平地にて獸を鬪はせ、又人と獸と相搏たせて、前低く後高き廊の上より、あまたの市民これを觀きといふ事、皆我當時の心頭に上りぬ。

そも〳〵このコリゼオは楕圓なる四層のたてものにして、トラヱルチイノ石もてこれを造る。層ごとに組かたを殊にす。ドロス、イオン、コリントスの柱の式皆備はりたり。基督生れてより七十餘年の後、エスパジアヌス帝の時、この工事を起しつ。これに役せられた

る猶太教徒の數一萬二千人とぞ聞えし。楕形の迫持八十ありて、これをめぐれば千六百四十一歩。平地の周囲には八萬六千坐を設け、頂に二萬人を立たしむべかりきといふ。今はこゝにて基督教の祭儀を執行せしむ。バイロン卿詩あり。

この場のあらん限は
内日刺す都もあらん
このにはのなからん時は
うちひさす都もあらじ
うちひさす都あらずば
あはれ〳〵この世間もあらじとぞおもふ

頭の上にあたりて物音こそすれ。見あぐれば物の動くやうにこそおもはるれ。影の如き人ありて、椎を揮ひ石をたゝむが如し。その人を見れば、色蒼ざめて黒き髭長く生ひたり。これ話に聞きし猶太教徒なるべし。積み疊ぬる石は見る〳〵高くなりぬ。コリゼオは再び昔のさまに立ちて、幾千萬とも知られぬ人これに滿ちたり。長き白き衣着たるエスタの神の巫女あり。帝王の座も設けられたり。赤條々なる力士の血を流せるあり。低き廊の方より叫ぶ聲、吼ゆる聲聞ゆ。忽ち虎豹の群ありて我前を奔り過ぐ。我はその血ばしる眼を見、その熱き息に觸れたり。あまりのおそろしさに、かの柱頭にひたと抱きつきて、聖母の御名をとなふれども、物騒がしさは未だ止まず。この怪しき物共の群りたる間にも、幸なるかな、大なる十字架の屹として立てるあり。こはわがこゝを過ぐるごとに接吻したるものなり。これを目當に走り寄りて、緊と抱きつくほどに、石落ち柱倒れ、人も獸もあらずなりて、我は復た人事をしらず。

支倉六右衛門

支倉六右衛門に關し、此日と五月九日に書いたものが、五月から六月にかけ、鄕里の新聞に、三回に亘り載つて居る。彼の譯官アマチの著『仙臺遣使錄』も近々公刊と聞くから省いて置く。茲には單に今猶ほ維馬ワチカン宮に保存せらるゝ支倉が携へて行つた、伊達政宗公の法王パオルス五世（五番目のパッパ　バウロ）に贈られた書翰を出して置く。

（大阪、昭和六年十一月四日稿）

……

於二世界一廣大成貴御親、五番目之パッパ　バウロ樣之御足を、於二日本奥州之屋形一、伊達政宗、謹而奉レ吸申上候

於二吾國一サンフランシスコの御もんばの伴天連、フライ　ルイス　ソテロ、たつときデウスの御法をひろめに御越之時、我等所へ御見舞被成、其口より、キリシタンの樣子何れもデウスの御法之事を承わり申候、其時しあん仕候程、しゆせうなる此事、まことの御定め之みちを奉存候、それにしたがつて、キリシタンに成度乍レ存、今之うちは、難レ去さしあわせ申子細御座候而、未無二其儀一候、乍レ去、某分國中、おしなべて下々迄、キリシタンに罷成申候やう、すゝめ可申ために、サンフランシスコ之御もんばのうちに、ワウセレハンシャ之伴天連衆、御渡被レ成可レ被レ下候、何やうにも、しゆせう大切可レ存候、御渡被レ成候其伴天連衆に、萬事に付而、御ちからを御ゆるし候て、可レ被レ下候、其伴天連衆に、我等手前より、寺をたて、萬に付而御ちそう可レ申候、同我國之うちにおゐて、たつときデウスの御法を御ひろめ被成候ために、可レ然と思食候程の事、被二相定一可レ預候、別而大きなるつかさを御一人、定め被レ下可レ預候、さやうに御座候はゝ、頓而〳〵、皆々キリシタンに罷成候事、一定と奉レ存候、我等何やうにも請取申候間、御合力之儀すこしも御きづかい被レ成間敷候、是に付而、我等心中に存候程の事、此フライ　ルイス　ソテロ、被レ存候間、貴老樣御前、奉レ叶申やうに賴入、我等使者を相定渡申候、其口を御聞候て可レ被レ下候、此フライ　ソテロ、さしそへ候て、我等家之侍一人、支倉六右衛門と申者を、同使者として渡申候、我等めうだいとして、御したがいのしるし、御足をすいたてまつるために、わざとロウマ迄進上仕候、此伴天連ソテロ、みちに而、自然はてられ申候者ソテロ被二申置一候伴天連を、おなじやうに、我等が使者とおぼしめし候て可レ被レ下候、某之國とノビスパニヤ之あひだ、近國に而御座候條、向後エスパンヤの大帝皇、ドンヒリッペ樣と可二申談一候、如レ其、其元、被二相調一可レ被レ下候、伴天連衆渡海成ため、奉レ願存候、猶以、某之上、貴きデウス天道之御前におゐて、御ないせうに叶申やう、奉レ願申候、猶此國如何樣之御用等可レ被二仰付一候、隨分御奉行可二申上一候、是式に御座候得共、日本之道具、乍レ恐進上仕候、猶此伴天連、フライ　ルイス　ソテロと、六右衛門口上に而可二申上一候、其くち次第に可レ被レ成候、早々恐入候、誠恐誠惶、敬白

慶長十八年九月四日

伊達陸奥守　花押
政宗　印

於世界貴御親五代目之
バッバ　パウロ樣
進上

支倉に關する文献の主なるものを參考のため左に掲げる。

……

明治二十四年　平井希昌著　歐南遣使考
同　三十五年　大槻文彦著　復軒雜纂
同　四十二年　東京帝國大學編　大日本史料　第十二編十二卷
大正　三　年　箕作元八著　南亭史說集
昭和　三　年　伊勢齋助編　歐南遣使考全書
同　四　年　木下杢太郎著　えすばにや、ぽるとがる記
同　六　年　幸田成友著　和蘭夜話
同　年　仙臺鄕土研究　六月號
同　年　雄山閣編　異說日本史　六

以上

（大阪、昭和六年十一月二十二日稿）

記念物

動物の虎でさへ、死ぬと皮を遺すと言はれて居る。人が死ねば多くは何か殘して行く。普通人の石碑一つから始めて、大きな物になると、エジプトの金字塔とか、羅馬のコリゼオの如きに至るまで、色々ある。

イタリアに來ると、建築とか彫刻とかの古い物が到る處にあるから、自然記念物といふ考が湧いて來る。記念物には個人のもあり、國民のもある。其目的は名の通り末代迄殘さうとするのだから、材料は固いものでなければならぬ。石とか銅とかで、風雨にさらされても變らぬ物がよい。夫れで印度やヨオロッパの如き石造の家の國々には、記念物に建築が中々多い。建築の中でも、宗教に關係ある寺とか墓とかゞ大部分を占めて居る。是は記念物の性質上當然の事である。

偖て印度、エジプト、イタリアなどを見て、日本を顧みると、記念物と稱すべきものが殆んどない。其譯はどうかと言ふに、日本は樹木の多い國で、木造國である。永久的の建築物は出來なかつた。時代〳〵によつて色々の小記念物が殘つて居る。奈良の大佛、平泉の金色堂、法隆寺、日光、高野山などは一時代の記念物であつて世界的のものと言ふ譯には行かぬ。又何千年も續くといふ保証も出來ない。

此の如く物質的記念物の少い代りに、我國には無形の記念物が澤山ある。藤原時代の文學、足利時代の茶湯、猿樂、德川時代の制度文學、明治時代の愛國心が夫れである。

尙ほ一層大なる理由は、日本が前途多望といふ事である。抑も一國民が大記念物を造るのは全盛時代であつて、此記念物が出來ると、此世の務めを終つた樣に、見る間に衰へ、遂に滅び

てしまう。其國民が續く中は、歴史が忘れられず、記念物の必要がない。それが繁榮の絶頂に達すると、虫が知らせ、自分等の存在を後世に知らせる何物かを造りたくなる。印度、アッシリア、バビロニアなどの記念物は皆此順序を追うて出來、且つ目的を達して居る。

イタリアへ來て見ると、同じ樣な感じがする。其全盛は古代や中世に在り、今は下り坂である樣に思はれる。

日本に記念物のないのは、まだ〳〵全盛に達して居らぬ証據である樣に思はれる。然し是から少しづゝ出來て行くであらう。銅像の流行などがそうでないかと思はれる。然し銅像の五百や六百出來た所で、中々日本を代表する記念物にはなれない。此間雜誌『太陽』に載つて居つた大町桂月の議論には私も贊成である。しかし日本はまだ〳〵前途多望であるから、桂月の注文程のものは出來まいと思ふ。

イタリアには一國の記念物たる價値のあるものが非常に多い。サン　ピエトロ寺一つでも、法王の勢力の記念物として充分である。是は見なければ話にならぬが、本願寺はいくら大きくとも、永平寺が如何に壯嚴でも、到抵かなはない。日本造りの家が中に入る程大きな柱があるのでもわかる。

此議論は、或人から、日本に記念物がないから何か欲いものだと言はれたに就いて、考へたものである。其後グレゴロ井ウス（一八二一―一八九一）の『コルシカ誌』を讀んだ處、次の事が書いてあつたので、早速其内容を此人に書いて送つた。

アヤッチオからオルナノまで

私は此物すごい所で、コルシカ第一の勇者が絶命した場所を、通行人に示す何物かゞないかと探したが、駄目であつた。是はコルシカには特有の點である。生氣ある記憶だけが彼等の悲しい歴史の唯一の記念物である。此島の岩石は悉く彼等の事業の記念物である。だから歴史上の事業が彼等の特性の一部として續く間は、記念柱もいらなければ、碑文もいらない。

抑も一國民が、記念物を以て其國を飾るのは、國が衰へたといふ事を証明することなのである。今日のイタリア全國は、記念物、肖像、碑銘の一大博物館である。唯コルシカに於ては、自然の狀態が今に保存され、歴史も生きて殘つて居る。又コルシカ人には石像などといふものゝ意味がわからないであらうし、又石像とコルシカ人とは釣り合ひが取れないであらう。云々（コルシカ誌第二卷二〇九頁）

（羅馬、四月十八日稿）

記念物　續

日本人は落ちつかない民族である。是は多分家屋が木造で、永持ちしないから、夫れが基となつて、轉々動く樣になつたのであらうと說く人がある。なる程文明國民の中で、日本人ほど轉居をしたり、職業を換へたりする民族がないであらう。然し家屋に源因すると云ふ事は、少々受け取れない說である。水でも動かないと腐つて來る樣に、運動といふ事は余程必要である。此運動あるが故に、人間が色々と變遷して行くのである。日本人に落ち付きがないと云ふのは卽ち今の言葉で言へば、日本人は進步的で腐らないと云ふことになる。一國民を腐らせない樣にしようと思へば、始終動かして置く方がよい。處が余り動くと發達しない。其加減が余程六つかしい。各國の歷史を見ると、都が古くなると、必ず腐つて來て、國が滅びる。

神武天皇は余程えらい御方であつたから、代が換る每に都を移すといふ制度を定められた。この都を移すといふ事は、害もあるが、利益もある。而して我國の上古などには、害が少くて利益が多かつたのである。それで天子樣が換る每に都も變つた。又維新の際に京都から東京に都を移したのも、非常に利益があつたと思ふ。もし都が依然として京都にあつたならば、革新の事業が花々しく行かなかつたであらう。

世の中の大記念物と云ふものは、都が固定してしまつて、腐りかゝつた時に出來るものである。是は羅馬などの古跡を見るとよくわかる。羅馬時代の遺物で尤も人の目につくものは、コリゼオ、カラカラの風呂場、アドリアノの墓であらう。コリゼオは、八萬人の見物人がはいつたと云ふ建物であるから、非常に大きなもので、巍然として雲表に聳えて居ると言ひたい。次にカラカラの風呂場は一萬八千人の浴客が同時にはいれたといふ。水風呂だの、湯風呂だの、蒸風呂だのあつたと云ふ事で、斯う云ふ物があつては、國が亡びたくなくとも亡びる。羅馬の滅亡は風呂にあると言はれて居るが、來て見ると成る程と思はれる點が多い。カラカラの風呂場の外にも、まだ大風呂場の跡があるが、形はカラカラのが一番能く殘つて居る。此二つは何れも亡國の前徵と云うてよからうと思ふ。次にアドリアノの墓であるが、是はチベル河の右岸に在り、この邊からサン　ピエトロを見た繪がよくある。國が永久に續くならば、又子孫が繁昌して行くものならば、何もこんな大きな墓を造るにも及ぶまい。段々國が下り坂になつて來て、自分の墓の草を取つて呉れるものもなくなるであらうと云ふ感じが自然と浮んで來るから大きなものを造り、自分の死骸を安全に保護しようと云ふ氣になる。處が僅かの間は、其目的が遂げられたけれども、中世時代になると、此墓は金城鐵壁の樣なものだから、謀反人や蠻民の寨となり、しまいには自分の棺桶まで掘り出されて、今日となつては此丸城の中心に空所があり、壁に此處にアドリアノの墓があつたと書いてある。此通り記念物と云ふ物は亡國の遺物

と外思はれない。

此等は古代イタリアの亡國標であるが、中世以後のものもある。それは寺である。サン　ピエトロやサン　パオロを見ると、善盡し美盡して居るに驚かざるを得ない。是等は天主教の遺物で、天主教が年一年と衰運に赴くから、もう無くなつても大丈夫の樣に、記念物が出來てしまつたのである。もう亡びる用意が出來て居るのである。そしてイタリア國は是等の亡國の產物で食つて居る樣なもので、毎年外國人から入る金が、何億圓になるか判らない。

（羅馬、四月廿六日稿）

【參照】

ダサイ

伊太利紀行　二二一―二二二頁

自然の偉大は永遠である。しかし、これを前にして、いかに人力の偉大は弱く、脆く、うつろひ行く果敢なさを哀れに曝露してゐることであらう。大闘技場が蠻族に荒らされたと同じやうに、サン　ピエトロの堂宇もやがて壞滅に歸するであらう。蔭の幕がその內陣にせまるまで、軒が破れ、天井が崩れ落ちることも絕無であらうとは思はれない。建築が相ついで興り、相ついで滅びるやうに、人類も、生れては死に、死んでは生れ、建設と破壞とをくり返して、自然の前に相ついで潰えて行く。ゲエテを打つた創造と生との力でなく、陰慘な死と破壞の作用とがこゝで人を打つ惡魔の遊戯である。無限な魔物の力は、ただに我々自身の形骸を亡ぼすだけに留まらない。常に近親、或ひは友の心に殘り行く我々の追憶をまでも、無殘に破壞しつくして、憐みの一念をその上に加へることすら忘れてゐる。シヤトオブリアンはポルチチで、ベズビオの灰の一塊を見たのであるが、手を觸れれば、すぐ形を崩す脆弱さが先づこの二千年前の遺物に對して彼を驚かす。ついで、しかも、一日毎にいくらかづゝ形を消しながら、なほそこに銘された女の腕をありあり彼は認めることが出來た。それは噴火の灰に埋もれたポンペイ一婦人の遺骸であるとのことであつた。これが正しく、人の心に殘る我々の記憶に外ならない。友の心に强く刻まれたその姿が、この速さと脆さとで日に消えて行く。「影の影」と歌はれた人の世にいとふさはしい追憶の推移である。火山灰の脆さにも似かようた定めない人の世の姿である。

ゲエテ

伊太利紀行　一七八六年十一月十一日　羅馬

今日は先づ水精エゲリアを見物して、それからカラカラの競馬場、井ア　アッピアに沿ふ破壞された墓地、メテラの墓を見た。この墓を見てはじめて、吾々は堅牢な築造工事の何物なるやを解することができる。これらの人々は永久の考を以て仕事をした。すべてのことが計算の中に入れてある。但し破壞者の狼藉と云ふことだけは計算の中に入つてゐない。どんなものでも、この狼藉に逢つては堪まつたものでない、君が此處にゐたらばと、心から慕はしく思つた。大水道工事の遺跡は此上もない尊い、一大裝置によつて一國民に飲料水を供給すると云ふのは、實にうるはしい雄大な計畫ではないか。午後に早薄暗くなつてから、吾々はコリゼオに着いた。これを見るとまた、すべての他のものが小さく見える。頭の中に其寫象を容れることができぬ位に、大きいのであるが、後で思ひ起して見ると、また小さく見える。併し引返して來て見ると、また更に大きく見えるのである。

アンデルセン

即興詩人　曠野

羅馬城のめぐりなる大曠野は、今我すみかとなりぬ。古跡をたづね、美術を究めんと、初てチベル河畔の古都に近づくものは、必ずこの荒野に歩をとゞめて、これを萬國史の一

ひらと看做すなり。起てる丘、伏したる谷、おほよそ眼に觸るゝもの、一つとして史冊中の奇怪なる古文字にあらざるなし。畫工の來るや、古の水道のなごりなる、寂しき櫛形迫持を寫し、羊の群を牽ゐたる牧者を寫し、さてその前に枯れたるあざみを寫すのみ。歸りてこれを人に示せば、看るもの皆めでくつがへるなるべし。されど我と牧者とは、おの〳〵其情を殊にせり。牧者は久しくこゝに住ひて、この焦れたる如き草を見、この熱き風に吹かれ、こゝに行はるゝ疫癘に苦められたれば、唯ゞあしき方、忌まはしき方のみをや思ふらん。我は此景に對して、いと面白くぞ覺えし。平原の一面なる山々の濃淡いろ〳〵なる綠を染め出したる、おそろしき水牛、チベルの黄なる流、これを溯る舟、岸邊を牽かるゝ軛負ひたる牧牛、皆目新しきものゝみなりき。われ等は流に溯りて行きぬ。足の下なるは丈低く黄なる草、身のめぐりなるは莖長く枯れたる薊のみ。十字架の側を過ぐ。こは人の殺されたるあとに立てしなり。架に近きところには、盜人の屍の切り碎きて棄てたるなり。隻腕、隻脚は猶その形を存じたり。それさへ心を寒からしむるに、我栖はこゝより遠からずとぞいふなる。

四月二十二日

カタコンブ

世にも名尚い羅馬のカタコンブと云ふものは、市外所々にある。中でもサン　カリストのが有名だ。市の南から東南に向ふ、羅馬全盛時代に造つた道がある。今日でも非ア　アッピアといふ名で呼ばれて居る。サン　セバスチアノ門を出て此道を行くこと凡そ一里、右側がいくらか高くなつて居る。カリストのカタコンブは此下にあるのである。門を入り綺麗な畠の中を通つて行くと、小屋があり山伏（トラヲピスト）が二三人居る。一リラを出して案内を頼むと、一人がろうそくを持ち、私にも一本くれた。入口で火をつけ、石段を降りて行くと、之がカタコンブである。土の中に縦横に穴を掘つたもので、私が日本で書物で讀んだ時は、もつと幅の廣いものと思うて居つたが、非常に狹い。そして平らでない。坂がある。下の方は余程深くまで行けるといふことである。兩側はろうそくの光で見ると、石か煉瓦で積んであつた。天井は中々高いから、頭がつかえる樣な事はない。土の中の穴であるから眞くらやみで、此時始めて、或る詩で讀んだことのある、火が消え腰につけた繩が切れて、前へも後へも行けなくなつたといふ場合のすごさを想像した。案内の山伏は色々と説明をして呉れる。暫く行くと、兩側の壁の石が落ちて居る所がある。此處で説明を聞くと、是が墓だといふ。成る程、見ると、横の壁へ穴を掘つて、死體を入れ、蓋をしたものである。時がたつに隨つて此石が落ちた。石には戒

名や其外色々のものが刻んである。そして此穴の中を見ると、土が少々あり、中に骨が見える。死人くさい事はなかつたが、何となく陰氣で、決して愉快なものではない。又所々大きな穴が横にあいて居る。此處へは何百人何千人の死骸を入れたものらしく、人骨が累々とある。中には立派な石棺に入れたものもあり、棺の蓋を取りのけてガラスの蓋をしたものも見た。のぞいて見ると、何百年とたつて居るから、着物も肉もなくて、骨だけそつくり殘り、土が少々ばかり着いて居る。又寺などもある。八疊敷位の廣さで、天井は圓く煉瓦などで積んである。壁に沿うて石の腰掛がある。之に腰かけて、薄ぐらいろうそくの光で供養もし説教もしたものである。

此穴道は一本でない、右へも左へも分れ道があつて、何里も續いて居るといふことである。是で大體判つたから、ろうそくの火の消える頃には再び光明世界へ出て來た。

此が名高いカタコンブで、精しいことは、書いたものが澤山あるから略して置く。外には無いもの、決して見事とはいへないが、一度は見て置くのも爲めになると思ふ。

（羅馬、四月廿二日稿）

羅馬に多いもの

天主教の本山の地だけあつて寺が多い。そして何れも大きく立派で、名工の繪や像を飾つてある。小さな寺までよせると、何百といふ數に上ることゝ思ふ。先づ私の見た大きな寺はサンピエトロ、サン　パオロ、バンテオン、サン　ミネルバ、サンタ　マリア　デ　アンゼリ、サンタ　マリア　マジョオレ、サン　ジオワンニなどである。

寺が多いにつれて、僧侶、山伏、尼の類も亦多い。到る處長い墨染の衣を着た者に遇ふ。

乞食も多い。寺の門前には必ず三四人位は居り、「旦那樣や御新造樣や」と日本の乞食と同じ樣な事を同じ樣な節で唱へて居る。處が羅馬の乞食は、感心に家の中へは入つて來ない。維也納では、外に居るのが少い代り、家の中へ入つて來て、鈴を鳴らすのが多いので、物もらひ乞食の類入るべからずと書いてある所が多い。乞食以外の物もらひも羅馬には中々多い。到る處酒手にありつかうとして居る。寺とか博物館の番人は、立派な制服を着ながら、頼みもせぬに説明をしたりして、金にありつかうとする。手段も中々巧妙で、見物人が來ると、遠くの方から今日はと云うて、ポケットの中で錢をじやかつかせる。十文錢をやると有りがたうと云うて禮を述べる。之がうるさい。も少し少いとよい。

夫れから花賣り、是も多くてうるさい。

羅馬の市は殆んど外國人で食つて居る樣なもので、又外國人が今頃特に多い。研究に來る人間よりも慰み半分に金を遣ひに來るのが多いから、宿料や間代は高い方である。夏になれば客が減り安くなるといふ事である。

それから新聞の辻賣りが多い。他の國では余り見ない現象で、日本に似て居る。ビヤツツアコロンナ邊で夕食をして居ると、午後の八時過ぎになると、翌日の新聞を賣りに來る。夫れが何十人と大聲で叫んで食堂の中まで入つて來る。

それから町で遊んで居る子供も多い。イタリアの子供は中々いたづらをする。それで落書が多い。西洋には落書が少いので感心したが、イタリアには中々多い。堂々たる建築物に裝飾の樣に落書貼札を禁ずと彫刻してあるものが多い。

それからストライキが多い。是は國の小い割に人間が多くて、衣食に窮するからだと思ふ。四五日前から始つた鐵道從業員のストライキは大仕掛なもので、一時はイタリア全國が通行止めになつた。

又イタリアは小國にも似ず、十二軍團二十四個師團といふ程兵隊さんが多いから、停車場は陸軍が占領し、線路には哨兵を置き、ストライキに對抗した。列車には將校が兵士を率いて乘りこみ、護衛をした。私も一日停車場へ行つて見たが、歩兵やら騎兵やらで、すさまじい勢であつた。

夫れから詐僞師やごまのはいも多いと云ふ事であるが、まだかゝらないから左程に感じない又昔しは山賊といふものが多かつた。今では少いが、私も今後の旅行には用心をする積りである。これも幸にまだかゝらない。しかし金のない人間は安全だらうと思ふ。

（羅馬、四月二十二日稿）

四月二十六日

ゲエテ、タツソオ散策の地

羅馬の眞中を南から北へ貫いてゐる町がコルソオといふ名高い通りで、之がピヤツア　デルポポロで終り、此處で城壁を拔け、また北に向つて一里足らずも行くと、チベル河を渡る。橋は石橋で、コンスタンチン大帝が戰爭をした所だと言うて居る。此橋の北詰まで電車が行く。或る日私は此處まで來て見ると、橋から下の方は幅の廣い道が川岸に沿うて出來て居り、並木が青々と繁り、サン　ピエトロの丸屋根を遠くに眺め、誠に結構な散歩道である。こんな良い所があるのにゲエテは何故此處で散歩しなかつたらうと思うた。然し考へて見ると、ゲエテの時代には電車がなかつた。そして今電車で來た道の途中から横へ入つた處をゲエテが能く散歩したと言ひ傳へて居る。餘り感服した處ではない。見晴しは今私が歩いた川岸の並木路には遠く及ばない。しかしゲエテは見晴らしなどには餘り頓着しなかつたであらう。

處がタツソオの散歩道は違ふ。方角も違つてゐる。チベル河の西側を向チベル（トラステエベレ）と稱へて、其西は山になつて居る。此處が羅馬中で一番高い處で、バンクラチオ門のある所が海拔八十四メエトルあると云ふ。此門の附近が公園になつて居り、頗る見晴らしが良く羅馬全體が見おろせる。ガリバルヂの銅像が門から北の方にあり、それから又北の方がタツソオの能く散歩した處だといふ。誠に良い所を撰んだと感心する。此詩人はゲエテなどより遙に自然を愛したに違ひがない。窮屈な社會や雜閙した場所は嫌ひで、此の樣に見晴らしの良い山の綠樹の下を散歩して、時には大欠伸でもしたものであらう。だからフエララの宮中に居つた時などはさぞ窮屈であつたらうと思ふ。そして外交官などといふ連中とはどうもそりが合はんから、始終不愉快に暮して居つたらうと思ふ。詩人などはやはり宮中へ入れて置くよりはこんな山の上に遊ばせて置いた方がよからう。

（羅馬、四月廿六日稿）

【參照】

アンデルセン

即興詩人　みたち

北より羅馬に入るものは、ポルタ　デル　ポ、ロの關を入りて、ピアツツア　デル　ポ、ロといふ美しく大なる廣こうぢに出づ。この廣こうぢチベル河とピンチョ山との間にあり。兩側にはいとすぎ、亞剌比亞護謨の木（アカチア）茂りあひて、その下かげに今様なる石像、噴水などあり。中央には四つの石獅に圍まれたる、セソストリス時代の記念塔あり。前には三條の直道あり。即ち井ア　バブ井ノ、イル　コルソオ、井ア　リペッタなり。イル　コルソオの兩角をなしたるは、同じ式に建てたる兩伽藍なり。歐羅巴に都會多しと雖、古羅馬のピアッツア　デル　ポ、ロほど晴やかなるはあらじ。

西洋の諺に「羅馬は一日で作られたものでない」と言うてある通り、羅馬の物は三月位で見切れもしなければ、五六回の通信で書き切れもしない。夫れで私も頭に浮んだ事をまだ〳〵書きたいとは思うて居つたが、遂に其折りがなく、アバチアの海水浴に數週間、維也納に二週間滯在し、旅には飽いて進まぬけれども、勇氣を鼓して遙々ベルギイまで來た。此頃になつて稍や暇が出來、又イタリアの事がそろ〳〵忘れかゝるから、北歐に居りながら南歐イタリアの事を、も少し書き加へて置かうと思ふ。それで名づけて「續イタリア便

り」としてあるけれども、ベルギイ國の首府ブリッセルで書くのである。其上私は日記といふものを書くこともあり、書かぬこともあり、大丈夫忘れぬ積りで居る事が、二三ケ月たつと、何時の間にやら片端から忘れて行く。私自身の爲めにもなると思ふから、少しく時間をつぶさうと思ふ。

（ブリッセル、九月十九日稿）

四月二十九日

墺伊兩外相の會見

オオストリアの外務大臣ゴルホウスキイとイタリアの外務大臣チットニイがベネチアに會合をした。斯う書き出すと、何か左傳の筆法に似て居るが、何も左傳の燒き直しをする積りではない。この事件も日露戰爭の結果であるから玆に書いて置く。ロシアは戰へば必ず敗れ、攻めれば打ち退けられるといふ有樣で、一年以上も續いたから、歐洲の他の國々では、誰も是迄の樣にロシアを恐れる者がなくなつた。從つて各國の勢力の順位が變つて來た。ロシア以外はいづれも昇つた方である。此處にロシア、オオストリア、イタリアの間に、バルカン半島といふ難物が横はつて居る。ロシアが弱くなると、バルカンに對するオオストリアとイタリアの勢力

が強くなつて來る。此機を逸せず、甘い計劃をしようと言ふのが兩外務大臣會見の目的の一であつたらうと私は思ふ。此會見は凡て秘密といふ事で、能くはわからぬが、先づそんな邊であらうと思ふ。ゴルホウスキイは多分チツトニイに向つて、私の國ではバルカンに勢力を擴げるから、貴國は此アフリカのトリポリ邊に手を延ばされては如何で御座る。

すると、チツトニイ

中々、御說の通り、宜しう御座る

などと言うて、御互に手を握りながら、余り仲を惡くしない樣にしようでないか位の事をつけ加へて分れた事であらうと思ふ。

（ブリツセル、九月十九日稿）

四月三十日

萬國心理學會

萬國心理學會終る。是は一週間程前から羅馬で開いて居つた。日本からは元良博士と榊君と二人出て居つた。

（ブリツセル、九月十九日稿）

五月二日

カイゼルの來遊

ドイツ皇帝ヰルヘルム陛下がベネチアに來られた。其前から南イタリアを廻つて居られた。何も特別の意味はないのであるが、この皇帝は誰も御存じの通りの野心家で、昔のアレキサンドル大帝とまでは成れぬとしても、せめて羅馬帝國位のものを造つて見たいと考へて居らるゝらしい。それで世界の八方へ手を擴げて、勢力を張らうと考へて居らるゝ。今では地中海も意の如くなり、東の方は小アジアまで勢力を張り、何時もバルカン問題に關係しては、トルコの肩を持ち、回教信者に我こそは彼等の保護者であると思はせて居られる。しかしトルコの文化を進めようとか、トルコの爲めに利源を開いてやらうとか言ふ御考はない。若しトルコに萬一の事があれば、す早く其領土の一部を占領し、甘く行けば、獨逸の領土を地中海まで續けようと考へて居られる。夫れで時々地中海へ來ては、あの邊を取らうか、この邊を取らうかと想像を畫いて居られるに違がない。北方の寒い國から來て見れば、必ず欲しくなるに違あるまいと思ふ。

（ブリツセル、九月十九日稿）

五月六日

今の羅馬

今の羅馬と昔の羅馬とは一つものではない。昔の羅馬は數百年かゝつて亡びたから、之が蘇生するには亦數百年はかゝる。そして今の羅馬はまだ蘇生して居らぬのであるから萬事不整頓といふ事は免れない。イタリアが歐洲の他の國々と色々の點で違ふ樣に、羅馬も他の國の都とは色々の點で違つて居る。ベルリンやロンドンやパリは今のベルリン、今のロンドン、今のパリ、として存在して居るが、今の羅馬は昔の羅馬によつて生活して居る。昔の羅馬の遺物がある爲めに、澤山の外國の見物人が來て金を殘して行く。此點が著しい差である。

歐洲の他の都會では、外國人を大切にして、外國人は事情に通じないから、丁寧に敎へてやらうと云ふ風が見えるが、イタリアでは外國人から出來るだけ金を取つてやらうと云ふ風が見える。

內外人共に困るのは、郵便の不整頓である。もつとも日本の樣な郵便制度を希望するのは無理だが、來て見ると、日本などでは想像の出來ない樣な事がある。維也納に居た時も配達夫が途中ビイル屋に入つて、ビイルを飲み話をしながら郵便物の仕わけをするのを見、又普通便は市內でも其日の中には容易に屆かないのを見て、不都合だと思うたが、羅馬では中々夫れ所ではない。一丁も離れない所で出した端書が五日かゝつたり、二日で屆くべきものが七日もかゝつたり、或は紛失したりする。大切のものは普通便では安心が出來ない。

かゝる不整頓が軍隊にも共通の樣に見える。私は敎練を見たり、其他の作業を觀た譯でないから、專門家の樣な觀察は出來ないが、兵隊には市內で時々遇ふから、大體の想像がつく。ラッパを吹いて行進中でも、規律は余り良くない樣に見える。日本の學校生徒の兵式敎練も、いざと云ふ場合にはイタリアの軍隊よりはましかも知れぬ。しかし近衞兵などは裝飾用のものだから遙に立派である。

イタリアは嘗て一萬以上の軍隊をアフリカに出して大敗北をしたことがあるが、不規律の結果だとは思はず、アビシニア人の襲擊に遇うたからだと辯解して居る。

羅馬の人には餘計なことを言ふ癖がある。ものをたづねると、簡單に言うて良い所に蛇足をそへる。又余り大きな町でもないのに、道を聞いても知らぬ巡査が澤山ある。一例を擧げて見よう。私は或日散步して憲兵に道を問うた。するとあなたは支那人ですかと云ふ。うるさくならん樣にそうですと答へ重ねて道を聞くと、一丁ばかり行つて聞いて下さいと云ふ答であつた。

馬車屋なども誠に良くない。外國人だと思ふと法外の料金を請求する。之は日本の車屋に似て居る。

電車の車掌は酒手も取らず、羅馬では非常に評判がよいが、錢を出せば錢だけの切符を呉れ、何處までと言へば五サンチイムか十サンチイムだけ高い切符を呉れるのが普通である。電車の收入の上からは大に功績があらうが、客には不快の感を與へる。

以上の如き事は要するに羅馬市がまだ蘇生せず、不整頓の結果であらう、他山の石とすべきである。

歐洲の他の都市では、夜は一定の時に店を閉ぢ仕事を休むが、羅馬では夜まで仕事をして居る職人を見る。日本の職人が夜まで仕事をするのは、多くは自分の意志によるのであるが、此處のは雇主の意志からの樣に思はれる。又他の都市では、飲食店の他は日曜は休みだが、羅馬には日本の荒物店の樣に雜貨を賣りそして飲食店を兼ねるものがある。こんな店は日曜も開いて居るから便利である。又藥屋といふのが面白い。何でも賣つて居る。そして倶樂部の樣な性質を帶び、近所の者が寄り集つて夜遲くまでさわいで居る。又或る學校では日曜にも講義をして居るのを見た。

此等は他の都會と變つて居る點である。

（羅馬、五月六日稿）

羅馬の客

イタリアは生活が樂だといふが、是はイタリア人特に下層社會の話で、此社會は餘程安く暮らす樣に思はれる。處がイタリアへ來る外國の見物人にはそう安くはいかん、却つて高い樣である。此も尤もな話。何故といふに、見物人で生活してゐる町であるが、この見物人なるものは、春の氣候の好い時の外、澤山は來ない。それで向島では花見時が書き入れ時である樣に、此處でも春の中に一年分をもうける譯である。

羅馬にはホテルや下宿屋が非常に多いが、見物の季節には皆滿員になる。素人家も貸間をして下宿屋位の間代を取り、細君などの小遣錢を作る。私も二週間ばかり或る辯護士の家に間借りして、下宿屋へ飯を食ひに行つたことがあるから、此間の呼吸が多少判る。此辯護士の家などにも、イギリス人やアメリカ人に空いてるだけの間を皆貸し、女中一人だけだから、細君は朝から晩まで眞黑になつて働いて居つた。一年分の小遣錢が樂に取れることゝ思うた。

生活が安くないから、外國からイタリアへ來る客は皆金持の樣である。是から下宿屋の模樣を書いて置かう。此下宿といふのはパンシオンというてホテルと違ふ點は、規模が小さいといふだけで、大きなパンシオンになると四五十人の客を收容して中々盛んなものもある。日本の下宿とは少々趣きが違ふ。食堂があつて食事時には皆此處へ集まつて來る。又應接間もあつて

夕食後などは、此處で話をしたり、音樂の出來る人などがピアノを彈いたりする。

私が前に居つた下宿では、多い時は、二十人以上も食堂へ來たことがある。客を國分けにすると、スイス、イタリア、イギリス、アメリカ、スウエデン、ポオランド、フランス、ドイツ、日本などで、人類館の樣なものである。そして何れも言葉が達者だからかなはない。

此連中は多くは樂しみにイタリアへ來て居るので、金を惜まず使つて見物して歩く。唯だスイスの男といふのが美術家らしく、研究旅行の樣であつた。夫れからスウエデンとかの婆さんは、少々キ印とかで、春はイタリア、夏はスイスといふ風に、各地に定宿があつて、旅から旅へと動いて居り、國へ歸ると病氣が起ると言うて、歸つた事がないそうである。六十五位になるが中々元氣で、朝にスウエデン語を使ふと、晝はドイツ語、夜はイタリア語と言つた樣に、必ず異つた言葉で話しをして居つた。此邊がキ印なのであらうと思はれる。私の隣りにはイタリアの文學士といふ男が居つた。其隣りには文部省の書記官と稱する人物、ドイツ語もフランス語も達者でない、其隣りは中々すました婦人で、金持らしく、寶石などをピカ付かせてゐるが、御面相は難有くない方。向ひ側は四十五六のフランス婦人、マドモアゼルといふから一人者と見える。着物などは中々立派だが、白髪など少々交つて居つた。

同じく向側のポオランド人の一行は、母らしい人が大將で五人連れ、二人の娘さんは二十歳前後。或る日綺麗な帳面に御名前を書いて下さいというて一同に頼んだ。私の處へも持つて來たから、日本字で書いてやると、珍らしがつてもつと書いてもらいたいと言ふ。まだ秋風は吹かぬが、平家物語の

古き都にきて見れば
　　あさぢが原とぞなりにける

の今樣を書いて譯文をつけてやつた。一人に書いてやると我も〳〵と需めて來る。公平に姓名だけを書いてやつた。

此下宿で十日以上も食事をし、それから外の下宿へ移つた。今度は小規模である。私の隣りにはベルギイの男爵令嬢が居る。芳紀方に二十、非常な神經質で、一寸もぢつとして居れず、食事中にも立つたり、食堂を出たりする。其隣りはオオストリアの未亡人、着物道樂と見えて、旅の身ながら、食事毎にお召換をする。某君の話によれば十日以上も食堂へ同じものを着て出たことがないといふ。此未亡人に男爵樣の話を聞くと

お國にはお母さんがいらつしやいますが、お一人で羅馬へ見えて居られます。御覽の通りの神經質で、誠にお氣の毒で御座います。そして近頃此處の若い殿方の中にお知り合ひが出來

まして、其方が結婚を申しこまれましたので、男爵令嬢は結婚もなさりたいし、そうかと言うて、イタリアの貴族には貧乏人が多いといふことを御存じなので、どうしたものかと、氣をおもみになり、本統にお氣の毒で御ざいます

と言うて呉れた。食堂で私が男爵樣に

今日は如何で御ざいます

と御たづねすると、何時も

良う御ざいません

との御返辭、張り合ひがない。そして食事も早々にして出てしまはれる。

其中にナポリから老夫婦が來て食堂がにぎやかになつた。是はオオストリアの退職少將で、イタリア獨立前に來たことがあり、其後メキシコで戰爭をした事もあるとか言うて、話が中々面白い、非常な保守主義の人で

もとイタリアが專制政治の時代は良かつたが、今は立憲政治となり、政府の力が弱く、ひどく惡くなつた

と言うて慨歎してゐる。此人も貴族の樣である。奥樣は二三日で國へ歸り、少將閣下はまだ泊つて居る。

其中に男爵樣と未亡人とが下宿屋に對してストライキを企てた。發頭人は未亡人であらうと思ふ。理由は食物が惡くて高いといふのである。未亡人は或るホテルへ移るからと言うて私にもストライキ加盟を勸めた。無論御斷りをした。そして二三日の中に引き越して行つた。處が此未亡人中々話上手で、食堂では欠くべからざる人物であつたが、出て行かれると急にさむしくなつた。すると フランス人夫婦が來、ドイツ陸軍大佐夫婦が來たが、いづれも二三日の滯在に過ぎない。今は少將閣下と私と二人だけになつた。

こんな話をすると、羅馬の下宿屋といふものが如何なるものかといふ事が判ると思ふ。下宿屋といふと下等に聞えるが客種はいづれも良いのだから、私なども安閑として長居をすると日本の貴族と思はれるかも知れない。

（羅馬、五月六日稿）

【參照】

ゲエテ

伊太利紀行　一七八六年十二月五日　羅馬

吾輩は羅馬に二三週間ゐる中に、多くの外國人が來て又去るのを見て、かくも多くの價

値ある事物を研究する態度の輕易なのに驚いた。有難いことには、此種の渡鳥のどれが此後北方で羅馬のことを話しても、吾輩は最早驚かない、吾輩の臓腑は最早その言説にびくともしない。吾輩も矢張羅馬を見た、そして既に或程度まで自分の見解を持つてゐる。

五月八日　有栖川宮殿下

有栖川宮兩殿下御到着。停車場に奉迎。公使と書記官とはナポリ御上陸の際奉迎、以後隨行。當停車場では日本人側は公使夫人、外交官補と私の三人だけで奉迎申上げた。

當地には六日間御滯在、中々御多忙にわたらせられた樣に拜聞した。

（ブリッセル、九月十九日稿）

五月十一日　改造中の羅馬

羅馬には記念物が多いが、いづれも今のイタリア政府になつてからの物でない。然るに三十年このかた、大國の仲間入りをして見ると、何となく物足らぬ。そこで政府は首府を綺麗にしようと餘程心をいためて居るらしい。隨つて市街も段々と綺麗になつて行く。又裝飾物などを寄附する人があると、早速頂戴する。從來私有であつた井ラ　ボルゲエセは買ひ上げられて市の公園となつた。名はもとのまゝでよさそうに思ふが、名まで變り、井ラウンベルトとなつた。中々よい庭である。樹木がよく繁り、古色を帶び、あまり手を入れない所に趣きがある。ビンチヤナ門を入りて眞直に行くと、青い樹木の中にキラ〳〵と、白い大理石の新らしい像がある。それに獨逸皇帝が寄附したのだといふことが彫りつけてある。ゲエテの像で、嘗て羅馬に居つたからといふのであるが、實は獨逸の國威を海外にひろめる手段の一つと思ふ。上はゲエテの立像、下にはイフイゲニイとミニヨンとファオストを現はしてある。作も惡い事はないが、羅馬の樣に古い彫刻物が澤山あつて、それを見慣れた目で見ると、餘り新しくて價値がない樣に思はれる。それから此像はゲエテだと思つて見ればそう見えるが、一寸見ただけでは判斷に苦しむ。それからミニヨンは一番よく出來て居るが、イフイゲニイは感服出來ない、も少し若ければよからうと思ふ。

獨逸がこんな物を造ると、フランスも默つては居らぬ。ユウゴオがイタリアに居つた事があると云ふので、伊佛會といふ組合の名義でユウゴオの像を建て、十日程前に除幕式が行はれ、國王御手づから除幕の勞を取られた。新しいのは仕方がないとして、顏の邊から胸までは先づ

無難だが、下部は一寸威服出來ない。特に足もとに首を出して居る獅子に至つては少々滑稽である。

獨々佛がこんな物を建てたから、英だの露だのも何か建てる樣になるかも知れない。各國の競爭場見たいなものになつて居る。支那が各國の競爭地となつて居る樣なもので、少し弱いと見ると、寄つてたかつて勝手な事をする。

それからピンチョといふ公園は、散歩場としては中々良い所である。此處にはイタリア人又はイタリアに關係のある名士の大理石半身像が到る處に並べてあるが、氣にくはぬ。其數は非常に多い。目的がよくわからない。裝飾であるか記念であるか、それとも兩方を兼ねたものか。いづれにしても目的にそはない。同じ大きさで幾何學的に排列してあるから、普通の散歩者には氣がつかぬ。又餘り單調であるから左程裝飾にもならない。いづれも名士であるとしても、功績には差等があらう。功績の大なる人のは氣のつきやすい處へ置くか、大きく作るか、又功績の少い人のは、蔭の方へでも置くかしたならば、良からうと思ふ。今の有樣では、神社の前へ澤山高麗犬を並べたと同樣である。

この中にナポレオンが加はつて居るのは、少々可笑しい。國を荒されたり、美術品を盜まれたりした御禮に建てゝある樣に思はれる。或る日ナポレオンの前を通つた處が、學校の子供が

二人で話をして居る。止まつて聞くと、一人は、ナポレオンはイタリア側だといひ、も一人は否々イタリアの敵だというて爭つて居つた。

こんな事は俄身代の者が、大家のまねをしようとするのと同じで、大急ぎで品をつけようとするから、色々滑稽な事が起る。外形だけ他國のまねをしようとすると、何時もこんな結果に終る。

（羅馬、五月十一日稿）

【參照】

アンデルセン

即興詩人　みたち

儀式あるべき處は、羅馬附近の別墅なり。かしはいとすぎ柱など生ひ茂りて、四時綠なる天を戴けり。昔も今も、羅馬人と外國人と、恒に來り遊ぶ處なり。麗しく飾りたる馬車は、綠しげき櫻の竝木の道を走り、白き鵝鳥は、柳の影うつれる靜けき湖を泳ぎ、しかけのいづみは積み累ねたる巖の上に迸り落つ。道傍には、農家の少女ありて、鼓を打ちて舞へり、胸（乳房）ゆたかなる羅馬の女子は、燿く眼にこの樣を見下して、車を驅れり。

海軍擴張案

イタリア議會に海軍擴張案が提出せられた。大部やかましい議論があつた樣である。イタリアでは、スペチア、ナポリ、ベネチアに海軍鎭守府があるが、スペチアの外は根據地などには覺束なさそうである。しかしイタリアでいざ軍といふ場合は、海軍が左程重要ではない。軍があればオオストリアとであるが、其時はオトラントの海峽を塞ぎさへすれば宜しいのである。朝鮮海峽さへ通行止めをする事が出來る今日、出來ない事がない。そうなるとオオストリアの南部が大恐慌を來たすのである。之にはオオストリアも余程困つて居るらしい。イタリアは此閉塞を容易にする爲め、アドリア海の東側に手を出して居る。今の皇后陛下がモンテネグロから來られた事などは色々の理由のある事であらう。

（ブリッセル、九月十九日稿）

五月十五日
大水

北イタリアに大水害があつた。ヨオロッパの北部では、日本の樣に勢のよい雨は降らぬが、イタリアでは、時々日本風の雨が降る。そして此二三日前から、續けざまに降つたので大水害を來たした。ヨオロッパにも時々大水害があつたり、大地震があつたりすると、漸く悟りを開いて、日本に同情を表し、日本人を中々賢いと思ふ樣になるであらう。

（ブリッセル、九月十九日稿）

五月二十七日
對馬海戰の報

對馬海峽に於ける我が海軍の大勝は全世界を驚かした。ロンドン、ベルリンなど大都會の模樣はさぞ通信の價値があるであらう。私は羅馬に居り、他國の模樣を見ることが出來なかつたが、茲には羅馬で見聞した事を一寸書いて見よう。所が此報道は不思議な事には歐洲中で一番早く羅馬に傳はつた。通信の價値がないでもなからうと思ふ。

五月二十七日の夕刊にはロンドン電報が載つてゐる。夫れによると、露艦隊が朝鮮海峽に入つたとある。記者は之に附け加へて、多分今日頃は大海戰が始つて居るだらうと想像してゐる。此想像が的中した事は後に判つた。

二十八日になると羅馬のトリブウナ新聞に天津から電報が來た。「新聞社は早速號外を出した。之が其日の午後で、號外賣りの鋭い聲が電車の響に混じて物すごいものがあつた。此電報には

海戰が始まり、日本が大勝利を得、露艦を四隻打ち沈め、其他にも大損害を與へたといふ事を長々しく書いてあつた。此報道が羅馬から歐洲の各地へ傳はり、捷報の最初のものと見るべきである。市民は夕刊を待ちこがれてゐる。夕刊賣は一層聲高く叫んで町々を走り廻つて居つた。

二十九日になると、晝頃又號外賣りが大聲で露西亞の大敗北何々新聞と叫んで走つて歩く。澤山の賣子の聲で、露西亞と大敗北とが同意義であるかの様に市民の頭にしみ込んだ。

私は其夜の町の模様を見ようと思うて、八時十分頃にカフエエ　アラニョの前へ行つて見た。すると丁度夕刊賣出の時刻であるから、何十人といふ賣子が大聲に叫んで來た。賣子の叫び聲は止れの號令の様に、散歩中の人々は何百人と新聞を買うて、通行も出來ぬ迄に、アラニョからピヤツア　コロンナ迄、人道に立ち止つて新聞を讀んでゐる。實に壯觀であつた。今日の夕刊の賣高は平日の五六倍にも達したであらうと思ふ。この夕刊には東京からの公報も私報も澤山載つて居つた。露艦が十二隻まで打ち沈められ、其艦隊が殆んど全滅したと書いてあつた。少々は浦潮へ逃げたらうと心配して居つた私なども、得意になり、通行の白人を見ると、何となく弱虫共の様に見えた。誰もが立ち止つて新聞に氣を取られて居るから、常ならば日本人でも通ると、珍らしそうにながめて居るのが、今日に限りて、私が此體たらくを注視してゐるのに氣が付いたものはなかつた。八時半過にもなると新聞を一と通り讀み終り、町の模様も再び常態にもどつた。

卅一日にジョルナレ　デタリア新聞は(何故に日本人が勝つか)といふ題下に長篇の社説を掲げてあつた。

(羅馬、五月卅一日稿)

五月二十八日

農業調査局

農業調査局創立大會が羅馬で開かれた。日本からも委員が二人出た。此會はイタリア皇帝の發議で出來たものである。皇帝はドイツ皇帝に似た點があり、野心家で、學問も中々あり、緻密な御方である。唯ドイツの様な强大な國でないので、餘程遠慮をして居られる。八方美人なことは兩帝共通である。イタリア皇帝は何とかして自分の國を人並にしたいと思うて居られるから、始終國の發達といふ事を考へて居られるらしい。何とかして羅馬を何かの中心にしたいと思うて居られるらしい。それで此會議を思ひつかれた次第であらう。之を成立させる爲めには、余程苦心をされた。政府全体も苦心をした。その結果先づ〳〵成り立つた様なものだが、ドイツとかイギリスとかいふ大國は、半分馬鹿にしてかゝつて居つたらしい。唯フランスだけ

は、自分の弟分がする仕事だから、助けてやらうといふ樣な態度で、大贊成をしたらしい。日本の委員などは、何か言はないと、大國民の體面に關するとでも思うたものか、くだらぬ字句の修正などをして得意がつて居つた樣である。

（ブリッセル、九月十九日稿）

六月一日　羅馬の氣候

私が羅馬に着いたのは四月の始めで、北方から來ると、其頃の氣候は誠に氣持がよく、空はうらゝかで、カンパニアの野の草は綠に、サビニ、アルバノの山々は春霞に包まれて居るといふ風で、何も氣候の惡いと思ふ樣な事はなかつた。だから私は書物に書いてある事を少し疑つたのである。三月から五月までは最も氣候の良い時で、外國の見物人は大抵此頃に來るのである。私が氣候の惡いのに氣が付かなかつたのも無理はない。

羅馬の氣候は天氣が惡いのでもなく、風が強いのでもなく、唯空氣が惡いのである。是も二三週間位の滯在では判らぬ。長く居ると氣がついて來る。あの綺麗なカンパニアの靑野原が空氣を腐らすのである。

カンパニアは高低のある野であるから、低い所は水の拔け樣がない。水が永く溜ると、それが蒸發しては空氣を腐らす。處々に溝を掘つて排水を計り、今では餘程良くなつて居るとはいふが、大雨が降ると水の溜る所がまだ〳〵ある。

私は或日大雨の後、ノメンタナ町を東に向つて郊外に出たことがある。暫くすると、昔貴族と平民とが衝突し、平民がストライキを企て、逃げて行き、中々町へは歸らず、貴族を困らしたといふモンテ　サクロといふ小山がある。その手前のアニエネ川に橋がある。大雨の爲めに此川の水などは非常に增して居り、川沿の低い土地は皆水溜りになり、川沿でなくとも、低い處には水溜が出來て、その水が拔けない。此有樣を見た時、始めて空氣の腐る理由が判つた。羅馬へ來て三月目位になると、段々身體に影響を受ける。身體といふよりは精神といふ方がよいかも知れぬ。氣力がなくなつて眠くなる。又他の國に居るよりは二時間位餘計に眠らぬと、身體が續かない樣な氣がする。何の事はない、怠け者になる。羅馬の人が怠け者になるのも同じ理由だと思ふ。之れが判ると、五月頃から先きになつて、勞働者などが公園の芝生の上に此處に五人彼處に十人とねころんで居るのも、成る程とうなづかれる。暑さが段々と烈しくなつて來て、六月になると羅馬は人口が餘程減り、八月頃には誠にさびしくなるといふ話である。そうであらうと思はれる。

（ブリッセル、九月二十日稿）

六月十日

羅馬人の避暑地

偖て羅馬の夏の空氣の善くない事は、今に始まつた話ではなく、シイザルの時代も、其以前も同樣であつたのだから羅馬人は昔から避暑といふ事を考へて居つた。附近の空氣の善い處へ逃げて行く。そして今も此避暑地が繁昌してゐる。又汽車といふ便利なものが出來たから、昔よりももつと遠くまで逃げて行く樣になつた。

海岸ではアンチヨが昔から人の行く處である。次はチボリ。之はアニエネ川の上流で、山が盡きて野にならうと云ふ處で、川は大瀧となつて羅馬附近での名所である。此瀧の上に町がある、之がチボリ。此處へ行つた時の事を一寸述べて置かう。

一行は日本人五人、總大將には東京帝國大學教授の某博士、一人は寫眞係、一人の歴史家は名所舊跡の說明係、農學者一名は植物の說明係、終りに私は永く居るからといふので交渉係。汽車に乘り一時間半も行くとチボリの町に着いた。

成る程羅馬の腐つた空氣の中から出て來て見ると、瀧があり、山にはオリブの林が茂り、土地は高く、遙にサン　ピエトロの塔の先を見渡すなど、愉快な處である、附近のアドリアノ帝の離宮の遺跡などを見物し、各人其職務を盡して羅馬へ歸つたのは、夕陽將にジヤニコロの山

蔭に沒せんとする頃であつた。

【參照】

ダサイ　伊太利紀行　二二二―二二四頁

チボリを訪うて、なほ同じ感愛が詩人の想像を刺激する。皇帝アドリアノの營んだ宏大な別莊が、今見る蔭も無い廢墟となつて茲に稀な旅行客の弔問を受けてゐる。八角堂の中央に、一本の野葡萄が壁を破つて、蛇のやうに天井の高さまで匍ひ上る。眞白な壁の上を、スコロパンドルの蔓草が一面モザイク模樣に繁殖する。高い絲杉が、倒れた圓柱に代つて、台石の近くから空に向つて枝をさし延ばす。この光景を見わたしながら、シヤトオブリアンは、或ひはロオマの偉大を讃賞し、或ひはその惡德を糺彈する。こゝにアドリアノ大皇帝は、その領土であつた全世界の姿を集めんとして、庭に東西の大建築、藝術の模型を立て列べる。豐麗に別莊の諸室を飾り立てる。アカデミイの諸室、ストイク教徒の殿堂、一切が出來上ると間も無く、その世嗣ぎはすぐ寶物をこゝから奪ひ出して他に持ち運ぶ。蠻人が別莊を占領して一旦破壞した後、要塞の姿にまた建築を改造する。ついで基督教徒が文

明を域内に移し植ゑ、修院を建て、庭を掘り耕して、果樹を栽培する。ルネサンスが訪れる。古代藝術の傑作を捜し求めて、また殿堂の廢墟をすきかへし、無殘に發掘された墓地の姿に大皇帝の別第を放置する。これら數百年毎にカンパニアの僻隅を訪れた大事件が、詩人の心にいよ〳〵諸行の無常、轉變の果敢なさを感ぜしめる。彼以前に、數百の聲がその耳に訴へた、同じ哀音の響きをまた聞き直して、しかもこれをあらがふ信熱も勇氣もすでに彼からは消えてゐる。眼前に對するものは、ただの破壞、廢墟の姿でなく、二重の空漠を示すアドリアノ皇帝の宮殿である。セラピスの眞の殿堂は埃及アレクサンドリアに建つてゐた。眞のアカデミイはアテネにあつた。そして、その何ちらもが破壞されて迹かたを留めない。アドリアノの寫しは從つてただの廢墟といふだけでなく、廢墟の廢墟、二重の破壞を示す、あはれな人の仕事の殘影に外ならない。

アンデルセン

即興詩人　落飾

暑き二箇月の間は、館の人々チボリに遊び給ひぬ。わがその群に入ることを得つるは、恐らくは小尼公の緩頰に由れるなるべし。橄欖の茂き林、石走る瀧津瀨など、自然の豐かに美しき景色の我心を動すことは、嘗てテルラチナに來て始て海を觀つる時と殊なることなかりき。この山のたゝずまひ、この風の清く涼しきに、我は復たナポリの夢を喚び起すことを得たり。我は羅馬の塵多き衢、焦げたるカムパニアの野、汗流るゝ午景を背にせしを喜びて、人々の我を伴ひ給ひしを謝したり。

小尼公の侍女と共に驢に騎りてチボリの谷間に遊び給ふときは、我はこれに隨ひ行くことを許されたり。姫は頗る自然を愛する情に富みて、我に些の寫生を試みしめ給ひぬ。荒漠たるカムパニアの野の盡くるところに、聖彼得寺の塔の湧出したる、橄欖の林、葡萄の圃の綠いろ濃く山腹を覆ひたる、瀑布幾條か漲り墮つる巖の上にチボリの人家の簇りたるなど、皆かつ〳〵我筆に上りしなり。

次には羅馬から東南に當つて、之も山の上でフラスカチといふ町がある。私は此處へは一人で行つた。別莊が澤山あり中々綺麗である。最も氣に入つたのは山に樹木の多いこと。麓は見渡す限り葡萄畠で、葡萄酒の名所。羅馬全盛の時代にはシセロ、ルクルス、ポンペウスなどの別莊もあつた。現在でも羅馬附近の避暑地中で第一に位するであらう。

【參照】

ゲエテ　伊太利紀行　一七八六年十一月十五日　フラスカチ

仲間は床に就いた。吾輩は畫を描くに使つた墨壺具を相手にして、この筆を執る。二三日雨が降らずに、温かくて、夏かと思はれる位に、美しく心地よく日の照る天氣が續いた。町は丘陵の上に在る、寧ろ山に沿うて建てられてゐる。眺望を遮るものがなく、羅馬を見下して、その先の海まで見える。右の方にはチボリの連山が見える。この愉快な土地に邸宅を構へたやうに、數百年前に富裕な騎奢な羅馬人が第一等の位置を選んで其別莊を建連ねたのである。吾々は早や二日程此邊をぐるぐる歩いてゐるが、矢張何時までも新しい、心を引きつけるものがある。

アンデルセン　即興詩人　山　寨

こゝは古のツスクルムの地なり。栗の林、丈高き月桂の村立ある丘陵にて、今フラスカチと呼ばるゝ處の背後にぞ、この古跡はあなる。クラテエグス、野薔薇などの枝生ひ茂りて、重圍をなせる榻列の石級を覆へり。山のところ〴〵には深き洞穴あり、石の穹窿あり。皆草叢に掩はれて、迫り視るにあらでは知れ難かるべし。谷のあなたに聳てるはアブルッチの山にて、沼澤を限り、この邊の景に、物凄き色を添ふ。あはれ此山の容よ。この故址斷礎の間より望むばかり、人を動すことは、またあらぬなるべし。

私はもつと先きの法師岩(ロッカ　デ　ババ)といふ、此處から一里程の山に向つて行つた。中々高い所にある。其村の近くへ來ると、大きな栗林があり、その間に山道がついて居る。此處はよく强盜の出る處だとは歸つてから聞かされた。徒歩で登つたから、六月の暑さに汗びつしりとなり、栗林の中に一と休みして一服吸ふ。暫くして村に着いた。筑波の町の樣に、山の半腹に出來て居る。村の入口までは馬車がどうやら來るが、村へはとてもはいれない。小供が驢馬を勸める。カボ山の絶頂までは十町位で驢馬の必要もないが、供といふ格にして驢馬引きと一緒に登つた。山の上は平らで古家が一軒建つて居り、パンと葡萄酒位は賣つて居る。その屋根の上の物見臺へ登つて見る。この山は、漸く四千尺位だが、四方がよく見える。カンパニアの野原越しに、オスチアの海の邊が西の方に見え、東は山また山と段々高くなり、眺望が良い。汗を流して登つただけの甲斐はあつた。

山麓にアルバノ湖が鏡の様に見おろされ、山と湖水との間が昔のアルバ　ロンガの跡だが、今は影も形もなく、夏草ボウ〳〵と繁り、唯だ一軒の山寺があるばかり。

二千年前には、毎年此山の上で祭をしたものだが、今はそんな優美な事がなく、留守居の者は一文たりとも餘計に酒代にありつかうとして居る。歸途驢馬乘りの登山者七八人に遇うたが、中には私の顔を見て、日本萬歳などとさけんで行くものもあつた。降りも歩くことにして、フラスカチまで二里餘、それから汽車で歸つた。

次には前に述べたアルバノ湖の西に當る一帶の地方。この湖水は昔の噴火口に水の溜つたもので、岸は切り立つた樣に險しいが、一面に草木が繁つて居る。また此一帶の地から見ると、向ふにはカボ山が聳え、法師岩村も手に取る樣に見える。湖水の周圍は二里半ある。

停車場から余程登ると町になる。之から道を南に取り、大木の林の中を抜けると、左に深くアルバノ湖を見おろし、右にはカンパニアを見渡す。馬の脊と言つた樣な處に道路が出來て居る、春や秋の散歩などにはさぞよからう。夏は感服出來ない。一里半も行くとカステル　ガンドルフオといふ町に着く。之も馬の脊にある町。この町を通り抜けると、又林の中に入り、右へ降るとアルバノの町へ出る。私はカステル　ガンドルフオで休んだ。此處へは羅馬から汽車で二時間位で來られる。貸別荘や宿屋で避暑をする人が多い。暑さは羅馬と左程變りはないが、空氣がよく、又朝夕は涼しい。

カステル　ガンドルフオの下に、アルバノ湖の疏水用のトンネルがある。今から二千三百年前に出來たもので、此種のトンネルでは世界最古のものかも知れぬ。此工事についても色々傳說があるが省いておく。

以上の樣な避暑地へ來て、羅馬人が命をつないで居るのである。

（ブリッセル、九月二十日稿）

【參照】

アンデルセン

即興詩人　避暑地

夏は人々暑さを避けんとて餘所に遷り給へば、われ獨り留まりて大厦の中にあり。涼しき風吹き初むれば人々歸り給ふ。かくて我は漸く又此境遇に安んずることゝなりぬ。

六月二十四日

サン　ジオワンニの祭

サン　ジオワンニの祭だと聞き、行つて見ることにした。某君の宅で話をして居る中に、十一時も過ぎたから分れを告げる。遅いので此邊は電車も少くなつた。止むを得ず停車場まで歩く。此邊からは中々にぎやかである。電車もサン　ジオワンニの方に向つてドシ〳〵出て行く。行けば行く程人出が多く。飲食店の客がワイ〳〵さわいで居る。提灯をぶら下げた所があり、篝火をたいてる所がある。偖てサン　ジオワンニ寺の門前で電車を降りると、右も左も黒山の樣な人で、中にはおもちやのラッパを吹く者があり、竿の先に鈴をつけたのを振りまわし、若い女などが來ると、顔の前で鳴らしたり、耳の傍でラッパを吹いたりして居る。それに酒が多少利いて來て居り、一種の無禮講と云うてよい。このサン　ジオワンニの鈴（カンパネラ）は名高いもので、昔は男が此鈴で女を呼び、女が男を呼ぶのに使つたものだそうだ。城門を抜けて市外へ出ると、新アッピア街道になり、南の方に向つて一直線に走つて居る。市外も中々盛んなもので、兩側の家は悉く酒屋に變つて居る。今日の祭に蝸牛の燒物でぶどう酒を飲むと、御利益があり、仕合せが續くといふ。そこで何十萬匹かの蝸牛が一晩の中に食ひつくされるといふ話である。

之は前から聞いて居つたが、蝸牛は食ふ氣にならぬから、此光景を見ながら先へ歩いて行くと、午前一時になる。其頃には町端れへ出た。カンパニアの夜の景がすゞ味を帶びて私を迎へ

る。東南の方のアルバノ山に丁度月が上つた頃で、晝の暑さも何時の間にか忘れ、路傍の茶店へ入つて休みながら見物する。歌ふ者がありをどる者があり、机をたゝいて樂隊のまねをする者があり、大變なさわぎである。此有樣を心ゆくまで見物して、宿へ歸ると二時を過ぎる頃であつた。此祭は夏祭である。冬祭はクリスマスで十二月廿四日、丁度半年目の六月廿四日にこの祭がある。

西洋と日本とは、一寸見ると違つて居るが、よく考へて見ると同じ事が色々とある。この祭などは二つとも日本にある。冬祭は正月で夏祭は盂蘭盆である。又冬祭などは特によく似て居る。クリスマスの木といふのは、何の事もない門松ともちばなを一緒にし、松の木の代りにえぞまつを使つたに過ぎない。又一方はキリスト教の影響を受け、一方は他の影響を受けたといふに過ぎない。又夏祭には日本では餅を食ひ酒を飲み盆おどりをやり、羅馬では蝸牛を食つてぶどう酒を飲み舞踏をするといふだけで、根本に於ては變りがない。此外にも日本に似た祭がある。節分の豆まきに當るものがある。西洋の福の神はニコロといひ鬼はクランプスといふ。鬼は角の具合顏の具合殆んど變りがないが、色が違ふ。日本には靑鬼赤鬼があるが、西洋では皆黑鬼だけである。又秋の彼岸もある。之は獨逸語ではアルレル　ハイリゲンと云うて日本の彼岸よりは余程遲い。春祭は春の彼岸とフイングステンである。此等の祭の起りは、佛敎よりも、

キリスト教よりも古いもので、後に宗教の影響を受けたと見る方がよからう。

（ブリッセル、九月十九日稿）

七月一日　イタリアの暑さ

イタリアの事情も大體わかつたから、そろ〳〵國内を旅行しようと思つて居ると、六月末になつて、俄に暑さが增して來て、攝氏三十七八度は何時の間にやら飛び越して、三十九度、四十度何分といふ高い溫度に達した。是は日蔭で測つた度數であるから、日のあたる處は非常なものである。石や瓦が燒けて、炎の樣な空氣がふわり〳〵と町の中を動いて居り、不愉快さ加減想像の外である。水で體を拭はうとすると、水が體溫以上に暑いから何の役にも立たない。シヤツ一枚で室内にこもり、暑い空氣が入らぬ樣に窓をしめ、漸く呼吸をして居るだけの話。食事毎に氷はつき物である。毎日の仕事は僅かに新聞を讀むのと、食事をするのと、四時頃に珈琲店へアイスクリイムを食ひに行く位。夕方から少し涼しいので公園へ行き、腰をかけて夕刊を讀む。

新聞で見ると、イタリア全國では、毎日何百人といふ日射病患者が出來、其中には日射病の即死といふのが毎日澤山ある。此暑さでは旅行どころのさわぎではない。早速羅馬を引き上げねばならぬと思ひ、愈よ出發と決心した。何時かまた來る機會もあらうと思ひ、南方全部、コルシカ、サルヂニア、シチリアの島々などは影も見ないで分れるといふことにした。

此春頃、南チロルのフロイデンスタインの城主シイボルト男爵から再三書面で招待されたのを、も少し後に行くと言うたのは惡かつた。後悔しても及ばない。此人は伊達家の樂山公などをも能く知つて居るといふから、又遇へば色々面白い昔話もあるだらうと思ふ。來年頃時間と旅費が出來たら、居城に男爵を訪ひ、ミラノに出て眞直南イタリアへ行きたいと思ふ。あまり當てにはならない。

（ブリッセル、九月十九日稿）

七月八日　イタリアを去る

暑さが烈しくて愈よ羅馬を立ち退くと言うたが、落ち行く先をオオストリアの海岸アバチアの海水浴場と定め、七月八日正午十二時の急行に乘つた。東北に向ひ、アペニン山を横切り、七時過ぎアドリア海岸の港アンコナへ着いた。

イタリアの東海岸には良い港が少く、北にベネチア南にブリンヂシ、其間は此アンコナが一つあるだけ、何れも天下の大勢には關係のない港である。アンコナとフイウメとの間に一週三四度定期船が通つてゐる。

アンコナに着き、停車場から直ぐ船へ行くと、八時半の出帆にはまだ間がある、一と通り市内を見物して出帆前に船に歸り、甲板上から久振りで海の上の月を眺め、暮色のアペニン山に向つて分れを告げた。船は時間通りに出帆した。

船室内は暑くてねむれぬ。甲板上を散歩する。其中に浪が高くなり、船客中にはそろ〳〵病人が出來て來た。午前二時頃に少し涼しくなり、一と眠りと思ひ床に就く。二時間程で目が覺め、再び甲板に上りて見ると、夜の間に船は北に向つて進み、もう向ふ岸の山が見える。殆んど二年振りで海上の日の出が見られると思ふと、何となくうれしい。

クワルネロ海峽を通る頃は、太陽も高く昇り、誰れ彼れとなく甲板に出て來て、あれは何村あれは何島と指ざして話し合ふ。客の中にはポオランド人が居り、例によつて露西亞征服の御禮を述べ、ホンガリア人も居り、御互に亞細亞人だと御世辭をまき、其外米人あり、伊人あり、交る〳〵來ては御高說をといふ調子。うるさいとは思ひながらも、然るべく話相手になつてやる。昨夜食卓で一人離れて食事をして居つた、尊大ぶつた男までが、人の居らないのを見計つて話をしかける。色々の話の中に、フイウメの水雷製造所には、日本の技師が二人居るが、二人共懇意だと言うて居つた。私はイタリアの海軍士官と鑑定して船の着くまで四方山の話をして分れた。

税關の檢査も簡單に濟み、アバチア通ひの船に乘り換へ、四十五分で小阜頭に着く。法學士のエム君が迎へに來て呉れ萬事都合よく、手荷物は赤帽にあづけて、ハブスブルク館に投宿した。

（ブリッセル、九月二十日稿）

海外視察錄目次

第一號

我が朱印船の安南通商に就て　講師　瀨川龜

支那の國語教育に就きて　教授　井上翠

第二號

バルマ記　教授　稻村純一

第三號

米國太平洋岸の商業教育　教授　伊藤資生

香港の政治　教授　小西茂

第四號

蘭領東印度概觀　教授　山上萬次郎

第五號

米墨見聞記　學校長　中目覺

滿洲に於ける滿人と其言語及書籍　講師　渡部薰太郎

英國博物館訪書錄　教授　鷲淵一

英領馬來に於ける土民教育に就て　助教授　內藤春三

第七號

青島概記　助教授　熊谷俊次

極東シベリヤに於ける教育事業の現狀　助教授　岩崎兵一郎

第八號

訪英印象　教授　吉本正秋

滯英見聞記　教授　上田畊甫

372
553

第九號
長江遊記　學校長　中目覺
東阿不利加遊記　學校長　中目覺
第十號
古書あさり其他　教授　本多平八郎
波斯見聞雜錄　教授　澤英三
アルゼリヤ事情　教授　小西茂
第十一號
比律賓記行　講師　野田慶一
バリー島　助教授　内藤春三
第十二號
バスクの國　教授　目黒三郎

昭和七年三月十日印刷
昭和七年三月十五日發行
（非賣品）
編輯兼發行者　大阪外國語學校
印刷者　河本芳治郎
大阪市天王寺區上本町七丁目六七
電話南四二八五番

終